

秋田県における中世石造遺物の型式・分布とその意義

——特に鎌倉後期の五輪塔を中心として——

磯村 朝次郎

I はじめに

秋田県下に残存する中世の石造遺物は、これまでの調査結果からみると板碑が大半で、五輪塔、宝篋印塔がこれにつぎ、関東、西日本各地に比し、その種類は単純な様相を呈している。

このうち紀年銘を多く有する板碑については、すでに江戸期段階で菅江真澄による指摘があり、明治時代の石川理紀之助、さらに昭和初年の県南を主とする深沢多市氏³⁾ら先覚の研究業績があった。

これをふまえ戦後『秋田県史』一考古篇⁴⁾において奈良修介氏がはじめて集約し、全県の視野から展望できるようになったのは画期的なことであった。また本年、同氏は『秋田県の紀年遺物』⁵⁾を刊行、さらに「東北の仏塔」⁶⁾について概観されるなど、この方面の研究は急速に発展してきたといえよう。

一方県南において精力的な探査を続けておられる榊田凌氏⁷⁾郎氏らはなお陸続と板碑、その他、新知見石造遺物の確認につとめつつあり、その意味から本稿は正に「日月出でて燭火やまず、の感がないでもない。しかし、筆者はかつていささか板碑の所在確認につとめる機会があり、その過程で、板碑以外の石造遺物の存在に遭遇することが多かった。これらの一部は県史考古篇、その他に紹介されているが、いかんせん造立紀年銘を有するものがなく、かつ広域にわたっての集成がなされぬまま今日に及んでいるのが現状である。そこで絶対年代の明確でない石造遺物であるが、完型遺物はもちろん、それ以外のむしろ残欠を掘りおこすことによって何等かの打開の途が開かれるであろうという考えから短時日であるが、当該遺物に接触してきたものである。

その結果はいまだ所期の目標には達しないが、板碑を含むその他の石造遺物の型式と分布にある種の曙光をみいだしうるように思考するに至った。ここにとりあえず秋田県内中世石造遺物—なかならず五輪塔についての調査概要とそれをめぐる問題点、加えて今後の課題について提言する次第である。大方のご批判、ご教示をたまわることができれば幸いである。

II 八郎潟周辺の五輪塔の型式、分布

五輪塔とは方・円・三角・半月・団形の基礎・塔身・笠・請花・宝珠よりなる塔型をいう。密教の五大思想にもとづき空風火水地を形どるので、各部を下から地、水、火、風、空輪とよばれる。供養塔婆、墓標として造立されたものである。

しかし、五輪塔はわが国で完成した塔といわれ、最古の石造在銘遺品は中尊寺釈尊院墓地の仁安四年(1169)塔で、つづいて豊後の中尾・石城に存し、古式塔の分布がいずれも辺境に偏在しているのが注目されている。造立の盛期は鎌倉時代とされる。

本稿においてとりあげる遺物はすべて型的に鎌倉末、南北朝期と鑑せられるものである。⁹⁾

なお、地域的に山本郡、南秋田郡、秋田市、男鹿市、仙北郡および山形、青森両県の一部についてふれる。鹿角郡、北秋田郡、由利郡、雄勝郡については宝篋印塔とともに稿を改めて明確にしたいと考えている。なお、平鹿郡については未調査である。

また、五輪塔各部を下より基礎(縦×横)、塔身(高さ×最大径)、笠(高さ×軒幅)、請宝(高さ)とし、いずれもcmで示した。種字は片仮名を用いる。石質は(石)=石英安山岩、(R)=流紋岩、(K)=安山岩、(S)=砂岩、その他必要に応じて記註する。なお秋田市内の一部は本年7月展示予定の小泉潟展に備え調査したものである。

1. 八郎潟東部

A、山本郡

(1) 山本町森岳八幡神社

- 塔身 21×29.8 種字磨滅不明 K
- 請宝 20.5 K
- 〃 25.5 9月輪内カ、キャ K
- 〃 21.2 カ、キャ 石
- 〃 21.0 カ、キャ 石
- 〃 23.0 カ、キャ 石
- 〃 20.2 7月輪内カ、キャ R
- 〃 現9 キャ、キャー、キャン、キャク K
- 宝篋印塔の空輪か。

(2) 琴丘町落合長面の近藤八右衛門が落合の俗称「なじりの田」を開墾したとき出土したと伝え、たたりのある五輪として知られる。

	1	2	3
基礎	18 × 25	20 × 25.5	19.5 × 27.3
塔身	19.5 × 25.8	18.5 × 25.5	17.8 × 24.5
笠	17.2 × 25	16.5 × 26	17.5 × 23.3
請宝	19.5	18.5	20

軒は厚さ中央で5.5、5.5、5.0、隅で6・5.8・6.5を測る。軒端より6cm入ったあたりから反りはじめ隅で0.5cm反転する。塔身の最大径は下半部にある。種字は塔全体に比し、小さめに彫られる。発心、修行、善提門種字。 石

B、南秋田郡

(1) 八郎潟町真坂広福庵

- 塔身 21×28.2 15.5月輪バ R
- 墓地に南北朝紀年板碑も存する。

(2) 八郎潟町浦大町墓地

- 塔身 17.5×25.5 バ 石
- 笠 20.5×31 月輪内ラ R
- 〃 19.5×30.5 月輪内ラ R

昭和33年6月R石質の基礎一個が認められたが、現在見当たらない。

(3) 八郎潟町浦大町常福院

- 基礎 24.5×30.8 18 月輪内ア R
- 塔身 22 × 24 15.5月輪内バ R
- 笠 16.6×24.7 10.5月輪内ラ R
- 請宝 20.6 6.3月輪、カ、キャ R

笠、請花は基礎、塔身と合わず、2基分である。宝篋印塔も存する。



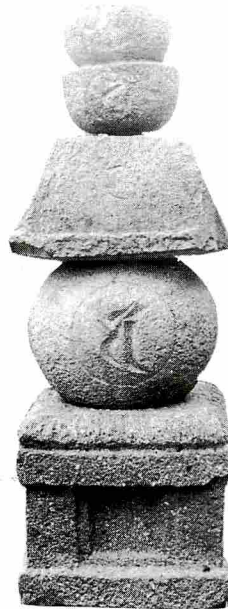
琴丘町落合



真坂広福庵



常福院



浦大町善知鳥



同左

同左

第1図 八郎潟東部(1)

(4) 八郎潟町浦大町善知鳥

古墳墓と思われる盛土上に宝篋印塔の基礎と共存している。

- 塔身 21×29.2 バ R
- 塔身 22×28.3 14.5 月輪内バ R
- 笠 16.7×31.5 円孔なし ラ R

笠は元禄年間に改造されたものとみられる。その際もとの種字面もげげり落し、細く小さな種字が刻まれている。これは塔身のバ種子の右側に刻まれたラと同一書体である。宝篋印塔基礎に対しても改造の手が加えられている。また層塔の笠でないかと思われる16×30軒の厚さ中央で3.5、隅で5.5、上端で20×21高さ2.4の段をつくり出したものもある。

(5) 八郎潟町一日市

- 塔身 2.0×26.5 石
- 笠 21×31 14月輪内ラ R
- 請宝 21 8月輪 カ、キャ R

塔身、笠はもと浦大町善知鳥に、請宝は夜又袋羽立にあったものである。笠の背面にノミ取りのあとが明瞭に認められる。

(6) 五城目町大川大福寺

- 基礎 26.5×35.5 やや台形、アー 石
- 塔身 28×36.5 バ 石
- 笠 16.8×27 12.5月輪内ラ R
- 請宝 20 種字不明瞭 石

2基分の残欠である。南北朝板碑もある。

(7) 五城目町下山内待月院

- 塔身 17×25 バ 石
- 笠 17.8×29.5 ラ 石

(8) 五城目町帝釈寺

- 基礎 27×31.8 月輪内ア、アム、アク 石
- 笠 20×30 ラ、ラン、ラク 石
- 請宝 23 カム、カク、キャン 石

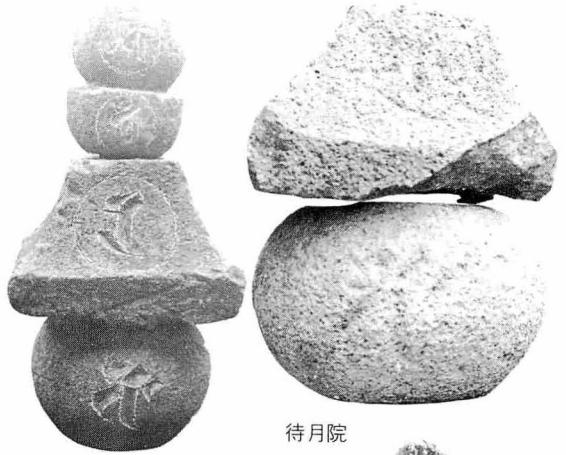
(9) 五城目町門前広徳寺

馬場目城跡の下方にあったものを後年寄せ集めコンクリートづけされてある。

- 基礎 29×31.5~30 台形 19月輪 石
- 笠 19×29.5 13.5月輪 石
- 請宝 7 基礎、笠、請宝の月輪内は発心、修行、涅槃門種字 石

(10) 五城目町高性寺

- 基礎 30×36 17.5月輪内ア 石
 - 塔身 27.5×38.5 23月輪内バ、パン、バク、最大径が上半部にある。 石
- 本堂左の石祠の上ののっている。



一日市

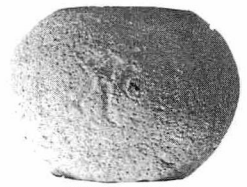
待月院



広徳寺



大福寺



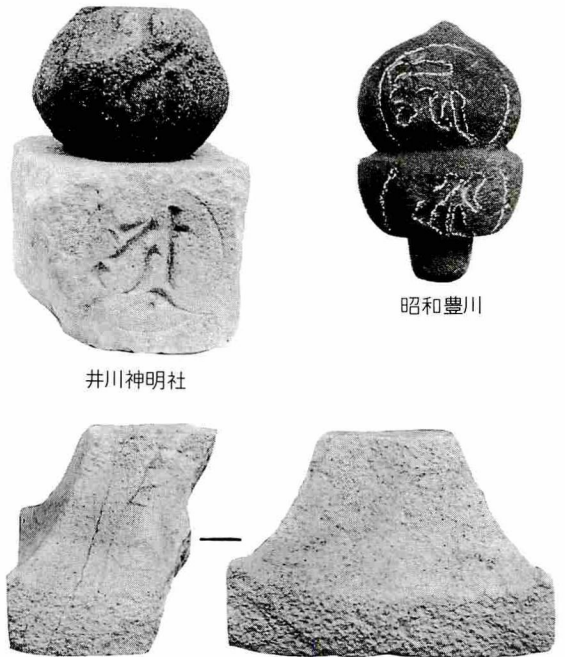
高性寺(1)



高性寺(2)

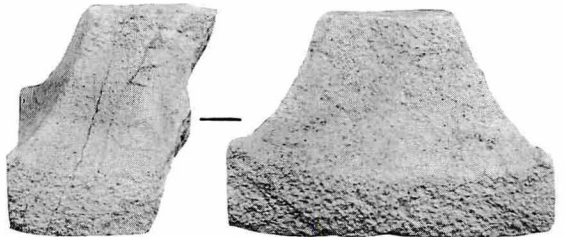
第2図 八郎潟東部(2)

- (11) 井川町浜井川神明社
 ○基礎 25.2×31 19.3月輪内ア R
 ○塔身 21.7×31.7 パー 石
 ○塔身 20.5×28 パーのみ判然 石
 他は欠損して不明なれど、バ、バクか。
- (12) 井川町浜井川ヒルネ 石
 ○請宝 22 空輪部欠、カ、カー、カン
- (13) 昭和町豊川 石川尚三氏
 ○請宝 23.7 11月輪 カ、カー、キャ K
 キャ、キヤー、柄が長い。
- (14) 昭和町船橋 奈良貞雄氏
 ○笠 16.8×25.5 月輪内ラ R
 同字の背後の丘陵を開田した際、砂岩製宝篋印塔笠および須恵系一珠洲焼か—の骨甕とともに出土。



井川神明社

昭和豊川

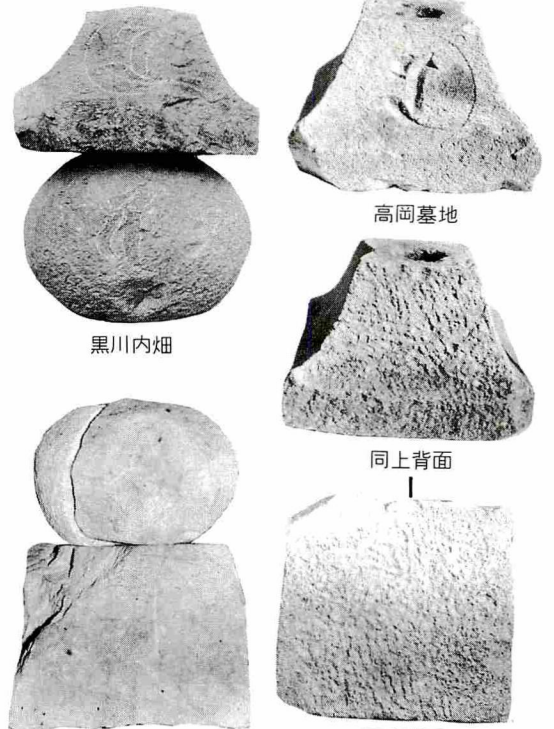


船橋

同左側面

C、秋田市

- (1) 金足堀内墓地
 塔身 20×28 K
- (2) 金足黒川内畑
 ○塔身 17.2×25.3 12月輪内バ R
 ○笠 16.3×25.2 11月輪内ラ R
 もと二本松に所在したものである。
- (3) 金足高岡墓地
 ○笠 20.3×30.5 14.5 月輪内ラ R
 背面にノミ取りのあとあり。「旧跡考」¹⁰⁾
 に請宝も図示してあるが、現在見当らない。
- (4) 金足片田墓地A
 ○塔身 25.2×32 パー 石
 ○ // 17.3×26.8 バ 石
 ○請宝 20.5 カ、キャ 石
 ○ // 20 カ、キャ 石
- (5) 金足片田墓地B
 ○基礎 21.5×25.5 ア 石
 江戸初期と考えられる花崗岩—石表裏仏もある。
- (6) 金足片田加茂神社
 ○基礎 21.5×27.8 16.3月輪ア R
 ○塔身 17.5×26 10×11の船形輪郭を彫りこみ内に8.5cmの弥陀坐像を彫る。下の蓮弁は5弁。上端の径15cm、ここに径12×11.5cm深さ5.5cmの円孔をうがっている。
 ○基礎 22×26 ア 石
 ○塔身 17×26.5 バ 石
- (7) 金足片田愛后神社跡¹¹⁾



黒川内畑

高岡墓地

同上背面

金足加茂神社

同上裏面

第3図 八郎湯東部(3)

- 塔身 16×23 月輪内バ 石
- 笠 17.2×24.5 ラ 石
- 請宝 19.7 カ、キャ 石

「愛后神社縁起」¹²⁾によれば永享年中上杉氏の祖周清阿闍梨が羽黒山より授けられたる不動尊を安置し、奉祀したという。種字、像容板碑各1基も残存している。

(8) 金足片田山崎

- 笠 16.1×26.7 11.5月輪内ラ R
のみ取りのあとあり。像容板碑2基残存。

(9) 下新城青崎剛力神社

- 基礎 22.8×28 16.5月輪内ア R
- 塔身 17×23.8 13月輪内パー R
- 〃 17.5×25 13月輪内パー R
- 〃 17×23.5 右半部欠損パー R
- 笠 16.5×? (欠損) 11.5月輪内ラ R

(10) 下新城下小友蚕沢

- 塔身 18×26.5 13月輪内パー R
- 〃 18.5×推24 推16.5月輪内三門種字R
か。欠損部多く不明。
- 請宝 19.5 種字不明 R
- 〃 19.4 種字なし R
- 〃 18 種字磨滅不明 R
- 〃 18.8 月輪あれど種字磨滅、請花部
にカ、カー、カク R
- 請宝 20 月輪あれど磨滅、カクか。 R

(11) 下新城岩城新城神社

- 基礎 20×27.5 16.5月輪内ア、アー R
アン、岩城館址の上、神社拜殿の礎石とな
っている。なお、真澄¹³⁾によれば岩城館の「館
神八幡祠、いつのとしらんか、城山より五輪
石ならん地形石に仏像きだみたるを掘り得て
しか。かんさねと祭りたりとか」と図示して
いるが、五輪にあらずして宝篋印塔の塔身で
あろう。所在未確認。

(12) 下新城上小友中坪

- 基礎 20.5×推26 17月輪内ア R
- 笠 a 17×26 11月輪内ラ R
- 〃 b 18×推28 11.4月輪内ラ R
- 請宝 21 6.5 7月輪内カ、キャ R
笠 a b 背面にノミ取りの跡がある。

(13) 上新城中学校蔵

- 基礎 20×27 11月輪内ア R
後部の大半を欠失。永田芳蔵氏によればも
とは中部落の墓地にあったものという。

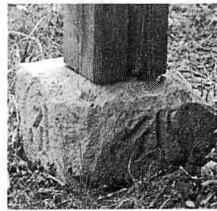
(14) 上新城保多野唐松様



金足愛后神社



下小友蚕沢



岩城新城神社



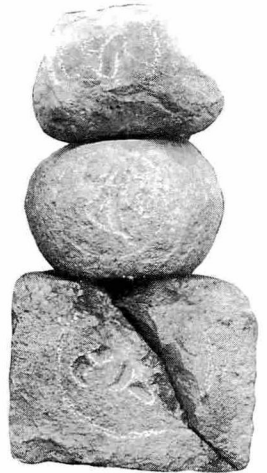
上小友中坪



上新城中学校



片田山崎



青崎剛力神社



上小友中坪



同上



同上

第4図 八郎潟東部(4)

○請宝 20.3 7 6.5月輪内カ、キャ R
 (15) 上新城小又昌東院

○塔身 18×24.5 13月輪内バ R
 住職辻氏によれば、もと石名坂竜泉寺跡にあつたものという。竜泉寺は明治40年、能代市清助町大日坊出張所へ合併されたが、上新城時代に徳治2年(1307)銘の舞尉面、姥面各一面、また鎌倉後期とみられる金銅薬師如来像、江戸寛文期の円空仏十一面観音菩薩立像(いずれも秋田県文化財指定)を蔵する古刹であつた。

(16) 寺内後城船着場
 ○請宝 19.4 7月輪内カ、キャ R
 ○〃 21 10、9.5月輪内カ、キャ R
 他に宝篋印塔の相輪の残欠がある。

(17) 寺内後城真澄墓地周辺
 ○塔身 20.8×30.4 舟形郭内座像彫る。K
 これに接して右に18cm月輪内バ種字を彫る。

○〃 19.5×28 13月輪内バ K
 ○笠 22×33.5 13月輪内ラ K
 ○〃 現高 12.5×30 推13.5月輪内ラカ R
 背面ノミ取り跡あり。

○請宝 19.2 7月輪内カ、キャ R
 室町初頭とみられる凝灰岩製小型宝篋印塔の笠が共存している。

(18) 太平黒沢墓地
 ○笠 a 15.5×24.5 10月輪内ラ R
 ○〃 b 16×23.5 10.5月輪内ラ R
 a、bとも背面ノミ取りあと歴然である。

2. 八郎瀧西部 —男鹿—

A、若美町

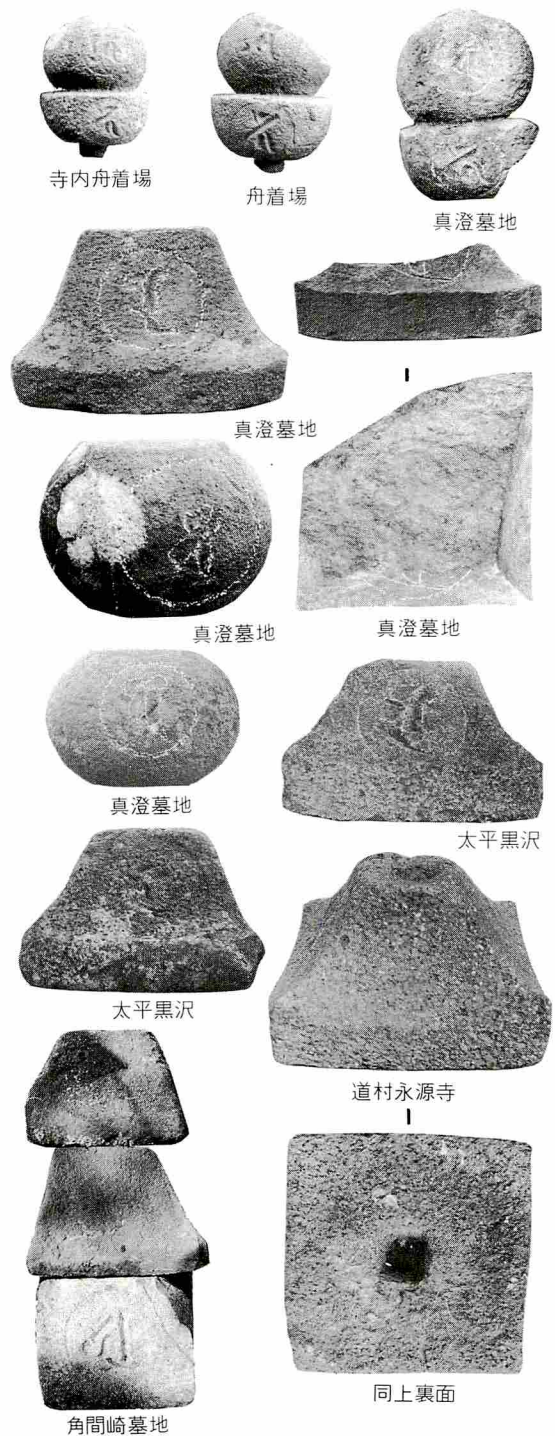
(1) 弘戸小深見峰玄院
 ○基礎 23×28.5 ア K
 宝篋印塔の基礎も残存する。

(2) 角間崎墓地
 ○基礎 22.5×26.5 月輪内ア R
 ○笠 22×30.5 ラ K
 ○〃 23×31.5 ラ K

(3) 道村永源寺
 軒は厚さ中央で5.5cm、隅で8.3cm、裏面に5×4.5cm、深さ3.5cmの方形孔を彫る。

(4) 鶴木館山入口
 ○塔身 19×26 ラ 石

B、男鹿市



第5図 八郎瀧東部(5) 男鹿(1)

(1) 船越竜門寺

- 基礎 22.5×33.7 台形を呈す。アー K
- 塔身 16.8×23 舟形輪郭を彫り7.5cmの弥陀坐像を彫る。蓮は3弁
- 塔身 21.6×31.5 舟形輪郭を彫り11.5cmの弥陀坐像を彫る。蓮座は5弁 R
- 笠 17.8×30 ラ 軒の長さ中央で6cm隅で7.5cm、1.7cmの反転。軒に比して高さがやや低い。 K



船越竜門寺



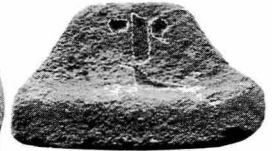
竜門寺

(2) 脇本館下大竜寺跡

- 笠 20×30.5 12月輪内ラ R
- 請宝 19.5 6.5月輪内カ、キャ R



竜門寺



竜門寺

(3) 脇本田谷沢桂源寺

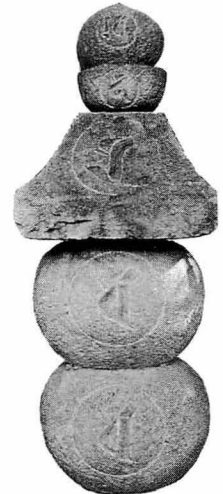
- 基礎 21×25 17月輪 ア下部欠損 R
- 〃 21.5×25.5 16.5月輪ア R
- 塔身 17.5×23 舟形輪郭を彫り6.5cmの弥陀坐像を彫る。乳白色
- 塔身 17.5×24.2 12.5月輪内バ R

(4) 脇本飯森館上

- 基礎 17×28 種字なし S
 - 笠 21×31 12.8月輪内ラク K
 - 〃 12×19 ラ、ラー、ラン、ラク K
- 宝篋印塔笠および相輪残欠あり。



大竜寺跡



延命寺

(5) 脇本浦田宗泉寺

- 基礎 24.7×30 17月輪内ア K
 - 笠 18.5×30.8 ラ K
 - 〃 19×29.5 ラ K
- 宝篋印塔基礎1、笠2個あり。南北朝板碑1基あり。

(6) 脇本寒風山中腹地震塚

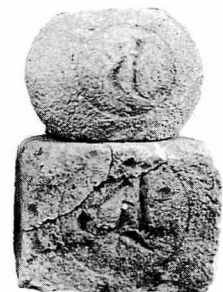
- 基礎 27×30.5 16.5月輪内ア R
- 笠 20.7×30 12.7月輪内ラ R

(7) 脇本大倉延命寺参道下

- 基礎 20×26 種字不明(磨滅か) S
- 塔身 21.3×27.5 15.5月輪内バ R
- 〃 21×28.5 15.3月輪内バ R
- 笠 19.5×31 13.5月輪内ラ R
- 請宝 17.4 6、6.5月輪内カ、キャ R
- 〃 20 種字不明 K
- 〃 19.5 破損甚だしく不明。 K



桂源寺



桂源寺

(8) 脇本大倉三島神社

- 笠 23.5×30 ラ K

(9) 脇本岩倉墓地

- 基礎 23.5×29.6 ア K
- 〃 23×26 17月輪内ア K

第6図 男鹿(2)

- 笠 23.5×32.5 ラ K
- (10) 脇本浦田坂の上¹⁴⁾
 - 基礎 26.2×31 18月輪内 ア R
 - 塔身 21.5×28.5 舟形郭内 8.5 弥陀坐像 蓮弁5弁 R
 - 笠 18×31 12.5月輪内ラ R
 - 請宝 18.5×6.2 6月輪内カ、キャ R
 - 基礎 19.5×25 16.5月輪内ア R
 - 塔身 17.7×23.6 8cm弥陀坐像5弁 R
 - 笠 17.8×25 11.5月輪内ラ R
 - 基礎 20×27.2 15月輪内 ア R
 - 塔身 17.3×23 13.3月輪内バ R
 - 基礎 25.3×30.5 ア K
 - 塔 21×29.4 バ K
 - 笠 20.8×31 ラ K
 - 請宝 19.5 種子不明 K
 - 基礎 25.5×29.5 ア K
 - 塔身 19×30.5 バ K
 - 笠 21×31.5 ラ K
 - 請宝 25.5 種字なし K
 - 塔身 20.7×30 バ K
 - 基礎 21.8×31 15月輪内 ア K
 - 塔身 20.5×28 12月輪内 ラ R
 - 笠 20×30.5 種子不明 K
 - 基礎 25.5×31 18月輪内 ア R
 - 塔身 21.2×29 舟形郭内に11cm弥陀の座像 蓮弁は5弁。 R
 - 笠 17×3 12.5月輪内ラ R
 - 請宝 18.5 6.2月輪内カ、キャ R
 - 塔身 18×27 舟形郭内12cm地藏立像 R
- (11) 脇本西念寺
 - 請宝 21.5 月輪かすかにあれど種子不明 K
- (12) 脇本樽沢中山神社
 - 基礎 29×31 アン K
 - 笠 17×29.6 ラン K
 - 〃 18.5×27.2 11.5月輪内ラ R
- (13) 脇本樽沢十王堂
 - 塔身 18.3×25.4 12月輪内バ 最大径は上半部にある。 R
 - 笠 17.5×26.5 105月輪内 ラ R
- (14) 脇本上百川板橋氏裏
 - 基礎 21.5×27.8 15.3月輪内ア K
 - 笠 21.2×30 13月輪内 ラ K
- (15) 脇本上百川八幡社
 - 請宝 17.5 5.5月輪内 カ、キャ 請花の上端は水平にカットされている。 R



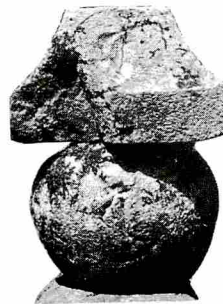
浦田坂の上 (マンダラ堂跡)



坂の上



坂の上



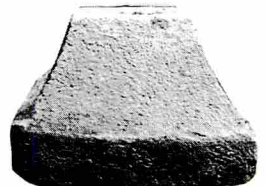
樽沢十王堂



中山神社



百川宝光院



同上背面

第7図 男鹿(3)

- 請宝 18.2 7.5月輪内 カ、キャ R
- 請宝 20 カ、キャ K
- 〃 24.5 カ、キャ K

⑩ 脇本下百川宝光院

- 基礎 24.5×27 アー K
 - 〃 18.5×30 台形ア、アク、アン K
 - 塔身 19.5×28 バ K
 - 〃 17.5×26.8 四門種字 K
- 塔身の上端を 状に6×5cm深さ2.5cmほる。



船川大竜寺



南平沢墓地

⑪ 五里合琴川

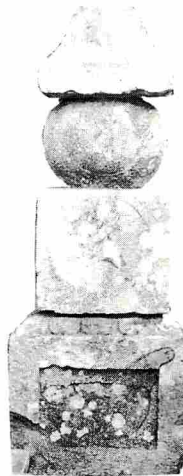
- 塔身 18×27.5 11.4月輪内バ R



地藏院

⑫ 船川港金川洞泉寺

- 塔身 17.5×23.3 11.5月輪内バ R
 - 請宝 22 7.5月輪内カ、キャ R
- 同寺の下方より珠州両耳壺が出土している。



女川地藏院



地藏院

⑬ 船川港船川大竜寺

- 塔身 22.3×28 舟形郭内10cm弥陀 5弁 R
 - 笠 20.5×30 12月輪内 ラ R
- 脇本館下よりより移転した際搬入せるものであろう。

⑭ 船川港南平沢墓地

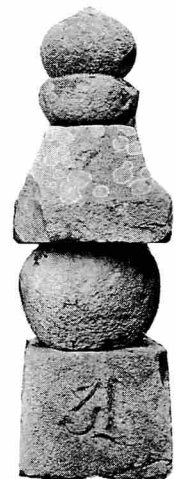
- 基礎 a 22×28 17月輪内 ア R
 - 〃 b 22×推28 16.5月輪内ア R
- bは現在見当らず。aは正面の下端を 状に切り落しているのは特殊。

⑮ 船川港女川地藏院

- 笠 21×33 種子不明 花崗岩
- 一石五輪塔請宝を欠失す。



台島十王堂



地藏院

- 基礎 25 18.2月輪内ア R
- 塔身 19 14.5月輪内バ R
- 笠 20 月輪不明瞭ラ R
- 基礎 22×26 17.5月輪 ア R
- 塔身 17×25.3 半欠種子 不明14月輪内バカ。 R
- 笠 19×26.3 13月輪内 ラ R
- 請宝 22 種字不明 カ、キャカ R
- 塔身 19.5×25 舟形郭内に11cm弥陀坐像を彫る。 R
- 笠 20×28 13.7月輪内ラ R

⑯ 船川港台島十王堂

- 基礎 20×23.7 14月輪内 ア R
 - 塔身 17.8×26 13.5月輪内バ R
 - 〃 18×23.9 12月輪内 バ R
 - 請宝 18 月輪なしカー、キャー R
- 笠1個あれど現在見当らず。

⑰ 船川港椿能登山下

第8図 男鹿(4)

- 基礎 25.5×29.3 アー K
- 塔身 21×30 バ K
- 笠 20×29.5 磨滅甚だし、種字なし。K
- 塔身 20.3 種子なし K
- 笠 21.4×3. 〃 K
- 塔身 18×23 パー R
- 〃 23×29 19月輪内 パー R
- 笠 16.9×28 12.5月輪内ラ、ラク R
- 〃 17.5×30 12.5月輪内ラー R
- 請宝 21 推8.5月輪内カ、カー、カン R
- ㉔ 船川港椿墓地
- 基礎 24.5×30.6 19月輪内発修涅槃種字 R
- 塔身 20.5×29 15月輪内 〃 R
- 〃 22.5×29.5 16月輪内 〃 R
- 笠 19.3×30 12.5月輪内 〃 R
- 〃 22×29.5 ラー K
- 請宝 25 カ、キャー K
- ㉕ 船川港椿船木喜四郎庭
- 笠 現 13.7×27.2 12.3月輪内ラ R
- 15)
- ㉖ 船川港双六館山
- 笠 17.2×25.5 11.5月輪内ラ R
- ㉗ 船川港双六墓地
- 基礎 22.5×26.5 16月輪内 ア R
- ㉘ 船川港小浜観音堂
- 笠 17.7×26.5 11.5月輪内ラ R
- ㉙ 船川港門前赤神社
- 笠 25×33 種子不明 角礫混り S
- 〃 14.7×22.5 種子磨滅不明 S
- 基礎 18.5×23.3 13.5月輪内ア K
- 塔身 19×25.2 14.5月輪内バ R
- 〃 18.4×23.4 13.5月輪内バ R
- ㊦ 船川港門前永禅院跡
- 基礎 21.5×25 17.8月輪内ア R
- 〃 19×24.5 16.5月輪内ア R
- 笠 a 16.5×26 12月輪内 ラ R
- 〃 b 15.8×26 12.2月輪内ラ R
- 笠 a、bとも背面ノミ取りのあとあり。ほぞ孔は方型にて特殊である。
- ㊧ 男鹿中五輪台
- 基礎 23.5×28 種子部不明欠損 R
- 塔身 13.5×27 12月輪内 バ R
- 請宝 21.5 不明 R
- 昭和51年12月 行衛不明
- ㊨ 男鹿中河原
- 基礎 23×27 14月輪内アー、アン、アク R
- 〃 21×26.5 15、15、16、月輪内アー、



椿能登山下



椿墓地 (水輪逆)



双六館山



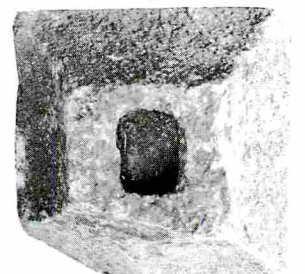
赤神社



双六墓地



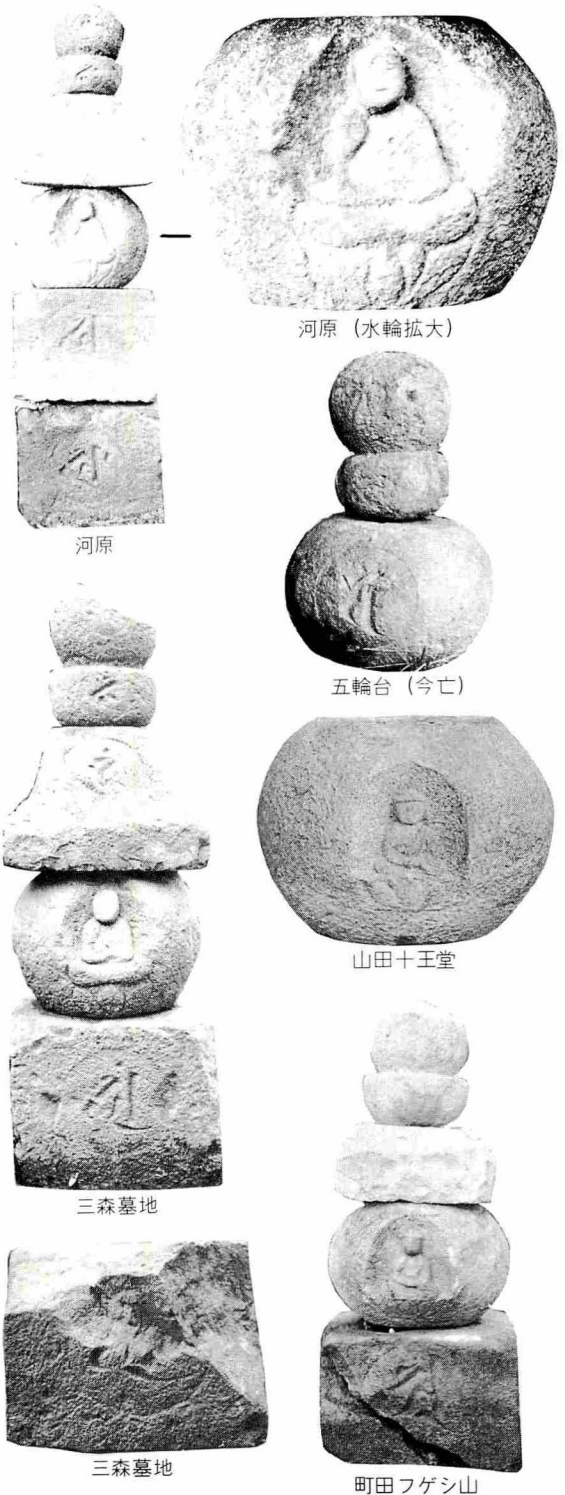
永禅院跡



永禅院跡

第9図 男鹿(5)

- アン、アク、上面に径10cm深さ7cmの納入孔 R
- 塔身 19.8×27.5 舟形輪郭、12.5弥陀坐像を彫る。5弁12.5月輪内バク、パー R
- 塔身 19.8×27.5 舟形輪郭を彫り12.5弥陀坐像を彫る。5弁、12.5月輪内バク、パー R
- 笠 17.4×26 10.5月輪内パン、パー、バク R
- 〃 19×27.8 12月輪内ラ、ラン、ラー R
- 〃 19.5×28 12.5月輪内ラー、ラン、ラクか。 R
- 請宝 20 月輪内カク、ラク、 R
- 83 男鹿中三森
- 笠 17.7×24 ラ K
- 請宝 21.9 7月輪内発、菩、涅槃種子 R
- 84 男鹿中三森墓地
- 基礎 23×28 15月輪内修・善・涅槃種字 R
- 塔身 20.5×26 舟形輪郭を彫り12cm、弥陀像を彫る。3弁、右左に12月輪内左パー右バク種字 R
- 笠 20×27 12.5月輪修善涅槃種字 R
- 請宝 20.5 7月輪内修・善・涅槃種字 R
- 基礎 23×26.5 15.5月輪内アー 13 R
- 月輪内アか、他欠損して不明
- 基礎 23.7×29 15.5月輪内アか他不明 R
- 85 男鹿中山田十王堂
- 基礎 18×23.6 14.2月輪内ア R
- 塔身 16×22.5 舟形輪郭を彫り6cmの弥陀像を彫る。5弁。 R
- 昭和35年3月15日杉伐根の中より出土。
- 86 男鹿中浜間口熊野神社
- 基礎 23×28.5 17月輪内 ア R
- 87 男鹿中浜間口岡杭
- 基礎 25×27.3 18月輪内 ア R
- 塔身 24×24 13.5月輪内バ、パーか R
- 笠 22×28.5 12.5月輪内ラ R
- 請宝 19.8 種字不明 R
- 〃 19 〃 R
- 88 男鹿中町田稲荷神社
- 基礎 24.5×30.5 台形呈す。ア K
- 笠 19.5×28 ラ K
- 89 男鹿中町田家の下
- 基礎 19.5×27 15.8月輪内ア R
- 塔身 18×25 舟形輪郭を彫り、9.5の弥陀像を彫る。 R
- 請宝 18 半載され 種字不明 R
- 寒風石製の石祠の中に納められ、笠端部が



第10図 男鹿(6)

打ち欠かされている。

(40) 男鹿中杉下八幡神社

- 基礎 19×24.8 13.7月輪内 ア R
- 基礎 19.3×23.2 13.2月輪内 ア R
- 〃 26.4×29.5 月輪なし アー K
- 塔身 16.6×23.3 11月輪内 バ R
- 笠 14.7×23.5 10月輪内 ラ R
- 〃 15×24 10.5月輪内 ラ R
- 〃 22×30 月輪なし ラー K
- 請宝 15 月輪内カ、キャ R
- 〃 14.3 月輪内カ、キャ R

(41) 北浦相川冷水

- 基礎 22×26.7 15.7月輪内 ア R
- 〃 22×25 15.3月輪内 ア R
- 〃 19.6×25 14.5月輪内 ア R
- 〃 19.5×25.3 14月輪内 ア R
- 〃 22×25 18月輪内 ア R
- 〃 現字15×25 18月輪内 ア R
- 笠 19×25.5 10.7月輪内 ラ R
- 〃 18.0×27 12月輪内 ラ R

◦請宝 a 18.5 b 19 c 18.7 d 17
e 18.5 f 19.5 g 20 (種字なし)

他はすべて カ、キャ 種字

この他十王堂の土台石として基礎、塔身各
一個が転用されている。 R

(42) 北浦真山、安全寺分岐点

- 請宝 18.5 種字磨滅不明 R

(43) 北浦安全寺阿弥陀堂

- 塔身 19×21.3 月輪内 バ R

(44) 北浦安全寺部落内

- 基礎 19×22 13月輪内 ア R
- 塔身 19×21.3 11月輪内 バ R
- 笠 14×22 9月輪内 ラ R

同地点にア、ピ、ラ、ウン、ケン、の板碑あり。

(45) 北浦湯の尻

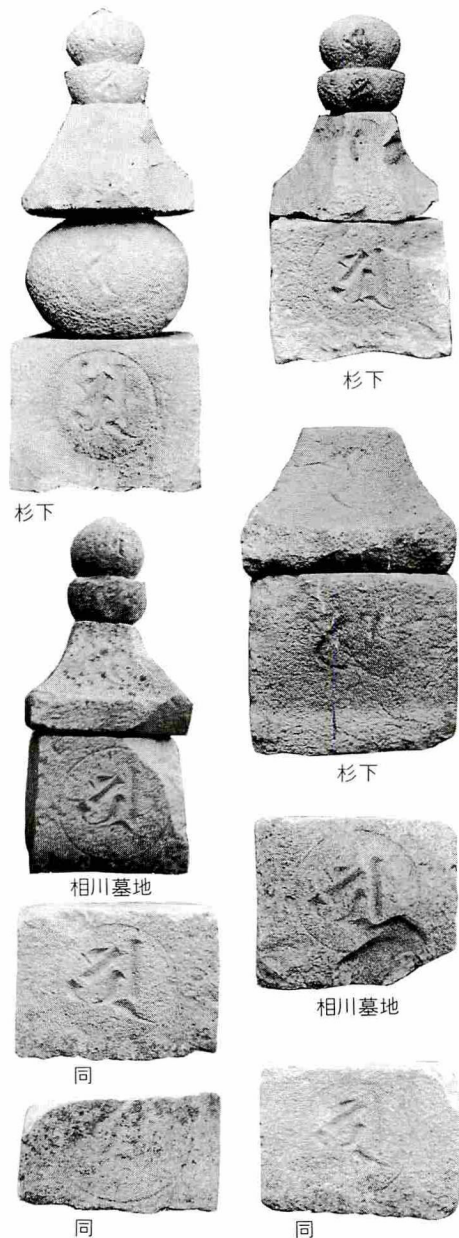
- 塔身19.8×27.5 舟形輪郭を彫り9.4cm弥陀像を彫る。 R
- 笠 16.6×24.5 13.3月輪内 ラ R
- 請宝 19.7 7月輪内カ、キャ R

(46) 北浦常在院横

- 請宝 23.5 種字不明瞭 花崗岩

(47) 北浦野村前野

- 基礎 20×25 14月輪内 ア R
- 〃 20×25 13.8月輪内 ア R
- 〃 24×28.6 19.8 ア R
- 塔身 18×23.4 12.5月輪内 バ R

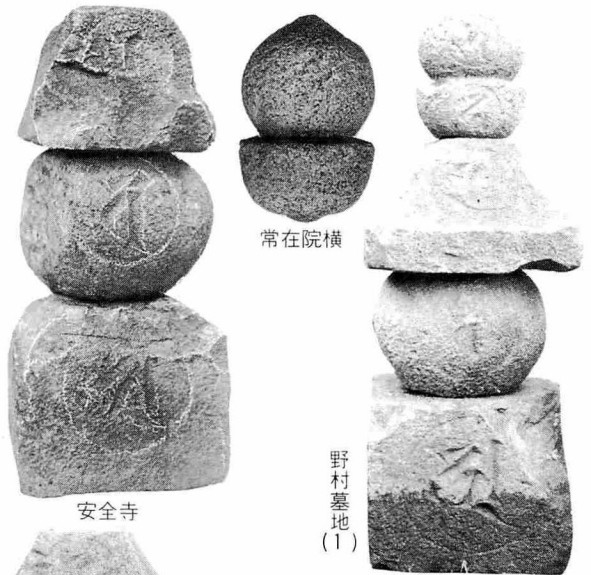


第11図 男鹿(7)

- // 18×25 13.5月輪内 バ R
- 笠 17.5×28 11.5月輪内 バ R

(48) 北浦篠田 (No.13・14以外は無作為並記す)

	基礎	塔身	笠	請宝
1	21×25 16月輪内ア	21×28.5 15月輪三門種字	19×28.5 12月輪内ラ	18.8月輪内 カ欠
2	22×27 16.5月輪内ア	21.3×30 15月輪内バ	16×推22.5 10.7月輪内ラ	21.3 7.5 8月輪カ、キヤ
3	25×推30 推18.6月輪ア	18.5×25.5 13.5月輪内バ	17×26.5 10.4月輪内ラ	20.7 6 18月輪カ、キヤ
4	20.5×25.8 15.8月輪内ア	17.5×22.5 13.5月輪内バ	16×推23.5 11.5月輪内ラ	15.7.5月輪内 カ、キヤ
5	19.4×25.7 16.5月輪アカ	17.6×26 種字欠損なし	16.5×25.7 10.5月輪内ラ	18.5 7月輪内 カ、キヤ
6	21.5×26.7 推15月輪内アカ	18×24.8 11.5月輪内バ	18×24.8 11.7月輪内ラ	19 欠損 推7.5 キヤ
7	21×25.7 15月輪内ア	23×31.5 14.5月輪内バ	22.5×30 13.5月輪内ラ	19 風化 甚だし不明
8	19.5×25.5 推14.5月輪内ア	19×23.7 13月輪内バ	20×27 13月輪内ラ	16.7 6.5 月輪カ、キヤ
9	25.5×推30 20月輪内ア	15.3×? 推11月輪内バ		16. カのみ 判然他不明
10	25.5×26.5 16.5月輪内ア	21.5×28 月輪なし四門(K)	18.5×30.9 14.8月輪四門(K)	
11	22×推28 13.5月輪内ア	19.5×30 種字不明(K)		
12	17.5×推23 推13月輪内ア			
13	52×66 種字なし	44×59 四門種字	39.5×62 種字なし	17. 23 種字なし
14	22×31.3 ア(花)	22.5×29.8 バ(花)	20×29.5 14月輪内ラ	21.5.8月輪 内カ、キヤ



安全寺



野村(2)

安全寺阿弥陀堂

野村(4)

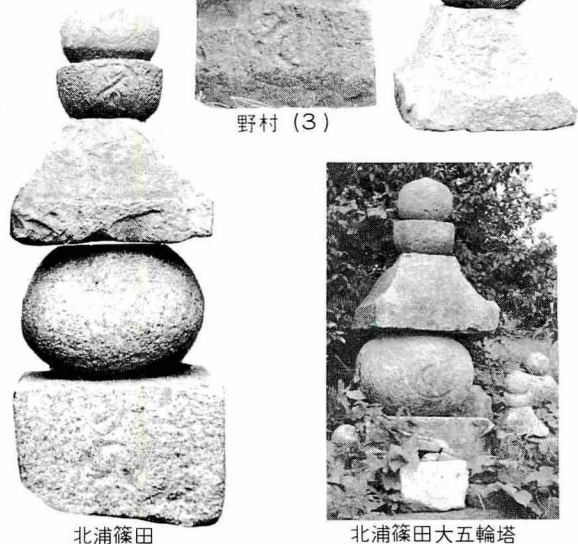
野村(3)

No.14は現在、土地所有者の福島亀蔵氏宅庭に移されてある。同氏の話によれば昭和初年、安全寺へ至る道路拡幅に際し、大五輪塔の下から石びつが出土し、その中に梵字を陰刻せる玉石多数が出土したという。註記以外石質はR。

(49) 北浦湯本妙見堂

	基礎	塔身	笠
1	21×26.5 14.5月輪内ア	19×26.3 12.3月輪内バ	17×25 月輪内ラ
2	20.8×27 15.7月輪内ア	23×29.8 10月輪内バ	16.7×24.8 10月輪内ラ
3	20.8×27 15.7月輪内ア	23×29.8 10月輪内バ	16.7×24.8 10月輪内ラ
4		22×31.8 種字部欠損不明	23.6×推39 17月輪内四門

○請花17.5 7月輪内空輪部にキヤを刻すもの



北浦篠田

北浦篠田大五輪塔

第12図 男鹿(8)

あり。請花の上端水平につくる。

本地点の五輪塔は後藤守一氏もふれている。

60 北浦西黒沢宝田寺

	基礎	塔身	笠
1	24.5×27 月輪内ア	23.5×31.5 種字磨滅	19.5×27.5 種字磨滅
2	31 × 30 月輪内ア	16.5×24.5 種字磨滅	17 × 27 "
3	24 × 28 月輪内ア	20 × 26 種字磨滅	18.6 × 26 "
4	30 × 30 ア		15.4×25.5 "
5	30×24.5 月輪内ア		22 × 32.5 なし
6	31.5×24 月輪内ア		18.5 × 20 月輪内ラ
7	19.8×24.5 ア		17.6 × 26 種字磨滅
8	19 × 25 ア		

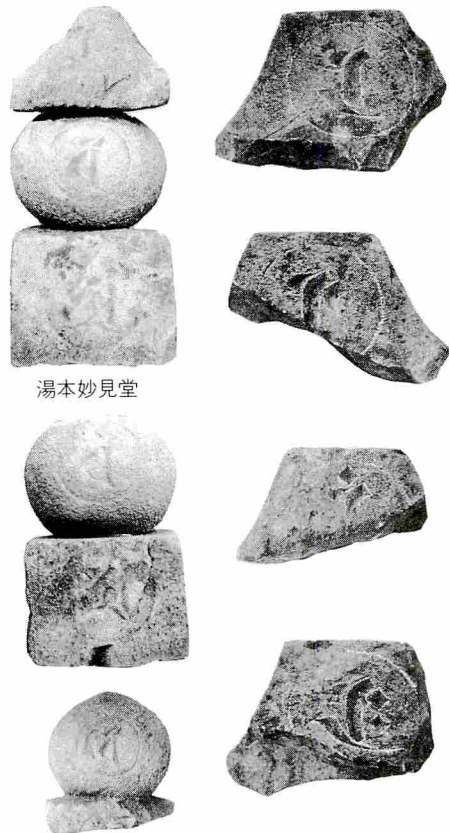
基礎No.1はR石質、他はすべて石質Sである。

61) 戸賀加茂……IVにおいて詳述する。

小 結

以上、八郎潟周辺2市7町、88地点に所在する五輪塔、同残欠について実測数値の1部を掲げ、註記してきた。後日、より詳細な数値をもって各部の型式の特徴をのべるつもりであるが、ひとまず概括的所見を記しておくたい。

- 八郎潟東岸99個体、西岸男鹿部290個体、そのいずれにも紀年銘を有するものが1件も見出し得ない。しかし、時代鑑別の一つのメルクマールである笠の軒上端と下端はほぼ平行に移行、作出される点、1、2の例外をのぞいて顕著な傾向として指摘される。笠上端の請花をはめこむほぞ孔は円孔が大部分であるが、門前にみる長方形にうがたれた2例は特殊で、いまのところこれ以外に類例はない。また笠底部に方形のほぞ孔をうがつ例は若美に1例あり、これも異例である。さらに笠部の屋根の後背を細いノミ状の工具をもっていわゆるノミ取りと称される作業痕を残している例が、特にR石質に良好に保存されている。
- 基礎については（一具のものであれば、塔身、笠、請宝も同じである）月輪を刻み、その中に種字を刻する例はR石質に圧倒的に多く、種字のみは（K）、（石）石質に多い。月輪は上端より0.5cm~1.0cm下位に接して描かれるのが普遍的である。種字を一面のみに刻するものが圧倒的で、3面がこれにつき、4面は湯本妙見堂の笠部にみとめられる。地輪に種字を刻さぬ、（磨滅したものもあるかも知れない）例は男鹿西黒沢の（S）石質に多く、その他北浦篠田のR石質に1例ある。地輪上端に孔をうがつのは男鹿中河原の1例。底部はいずれも荒削りされているのはすべてに共通する。
- 塔身については最大径が下半部にくるものが多く、かつ上端に小孔をうがつ例が2例ある。浦田坂の上の例は奉納孔であろう。像容陽刻はR石質に圧倒的。蓮弁は陰刻が多く3~5弁である。
- 請宝はほとんど一石彫成である。ただし北浦篠田の1例のみ別石であるのはきわめて異とすべきである。
- 完型塔は教えるほどしか存在せず、残欠が大部分である。最大塔は北浦篠田にあり、残欠より推察して最小塔は飯森館下の笠である。
- 遺物の所在地は墓地、社寺等、宗教的営為の地にあるのが大部分である。



湯本妙見堂

第13図 男鹿(9)

Ⅲ 雄物川流域の石造遺物管見

雄物川の河口寺内後城、船着場付近に五輪塔その他の残欠が見出されることは前章に記した。しかして同河川を遡航した流域においても、2、3指摘され、それが意味するところきわめて大であると考えるがゆえに、以下やや詳細に記したい。

1. 仙北郡西仙北町大沢郷宿椒沢

刈和野の西を流れる雄物川は強首、杉山田地区で大きく屈折する。椒沢部落はこの杉山田から直線距離で約1.5 km、大沢川の下流に位置する。

ここに2基の五輪塔を構成する残欠が「五輪さま」とよばれてまつられている。¹⁶⁾ 実測寸法ならびに所見を記す。

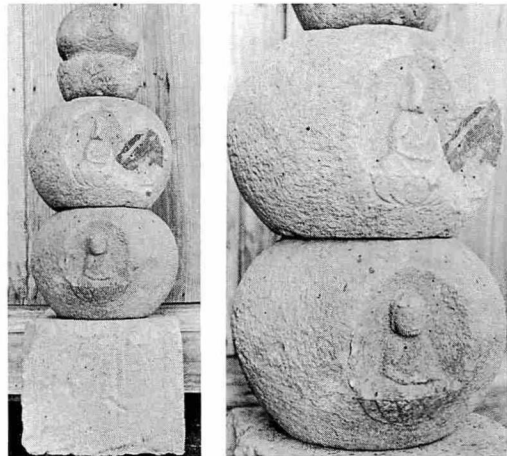
基礎：22.3×27.0 17月輪内 ア、塔身a：21.0×26.7、10.0×10.0の半円形の舟形輪郭を彫り、内に像高9.5cm、膝幅7.0cmの座像を厚肉彫りする。膝下の蓮弁は5弁を数える。

塔身b：21.5×27.0、11.5×11.0の舟形の輪郭を彫ることaに同じ。その内に像高9.0cm、膝幅7.0cmの座像の厚肉彫り、蓮弁の5弁もaと同一である。請宝、18.5×最大径16.0、7.5各1の円内にか、キヤを彫る。請花下の突起は残存しない。像容は阿弥陀如来であろう。石質はすべてRである。

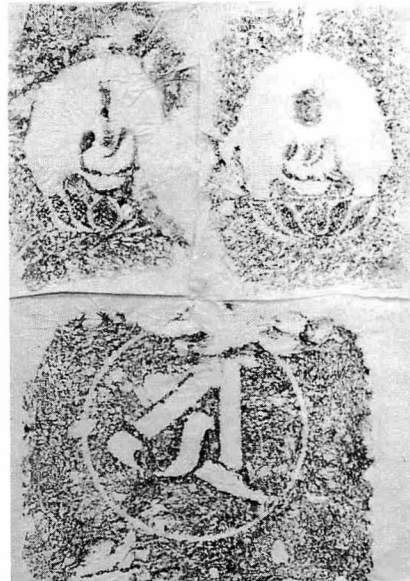
塔身の1個は同地の佐々木三郎右衛門氏によると大正11年、杉山田部落の伊藤久治郎氏が大沢川の下流で川かりをしているとき、泥中より掘りあげたもので、しばらく自家でまつっていたが、その後現在地へ納めたものという。

これ以外の残欠は古くからこの地にあったらしく、江戸時代に長谷寺の是山もこれを被見し100×20cmの板にその間の事情が墨書されている。

右五輪之儀ハ佐藤弥治右エ門地所ニ有之候処出羽国亀田領由利郡赤田□村山・是山和尚仙北郡大沢郷村田代堂鎌田弥四郎宅ニテ一夜泊り夫が円行寺へ・御通候之節、右五輪ヲ見立、此所ニ新ナル五輪ハ立居、此五輪ハ本地阿弥陀・如来竜神ハ前立ニテ旱魃之節雨乞致候得ハ利徳アルト是山和尚ニ・被仰依之旱魃之時雨乞致候処御利生有之、右ニ付近村之御寄附ヲ受ケ御堂建立シ厚ク信仰仕候也 別当 佐藤弥治エ門
(・改行、句点筆者、年月日記載なし)



第14図 西仙北町椒沢五輪塔



第15図 西仙北町椒沢五輪拓影

2. 仙北郡大曲市土肥館八幡神社境内

八幡神社境内に存在する石造五重層塔で昭和31年5月、秋田県重要文化財として指定されている。¹⁷⁾ 本層塔をここにとりあげる理由は秋田県における五輪塔の絶対年代決定に欠くべからざる重要遺物であることによる。まず例によって計測数値その他を掲げる。

総高220cm、基礎は一石彫成で2段、上段は台形を呈する。初層軸部=塔身は36.0cm×38.0cm～37.5cmを測り、かすかに上端がすぼまる。中央および左右側面に月輪を刻み種字をほる。中央月輪24cmア、右の月輪径20.5cmアク、左のそれは21.0cmアで、発心、発行、涅槃門の種字である。石質はR。

中央月輪の左右につぎの刻銘を有する。

(右) 右志 為虎王丸

(中央) 月輪中種字 ㊦

(左) 元亨三年七月五日敬白

笠は5層で、それぞれ下端は3段につくり、上下端にほぞ穴をうがっている。請花は素面、高さ7.0cm宝珠先端半欠14.0cm。

笠各部位の計測値は以下のものである(単位cm)

	高さ	軒の幅		軒の厚さ	
		下端	上端	軒中央	軒端
5層	28.0	32.8	32.0	4.5	7.0
4層	23.5	38.5	38.0	4.5	7.5
3層	25.2	41.0	40.7	5.3	10.0
2層	27.5	47.8	47.5	7.0	9.5
初層	31.4	50.4	49.7	6.6	10.4

周知のように本層塔は、いわゆる虎王丸塔として著名であるが、菅江真澄の「月の出羽路」によれば、つぎのような事情下に出土したものであった。

「寛政の末、享和のはじめ此八幡宮の社地の道を開き墾せしときは、とや館町の人々集まりて日毎にかいならし、今はとや館町におしならひて八幡町といへる処六、七戸ぞ作る。ここかこの土の底より五輪石の落ちたるを掘出て組立層上しかば、地座に発菩提心為虎王丸と刻たり。

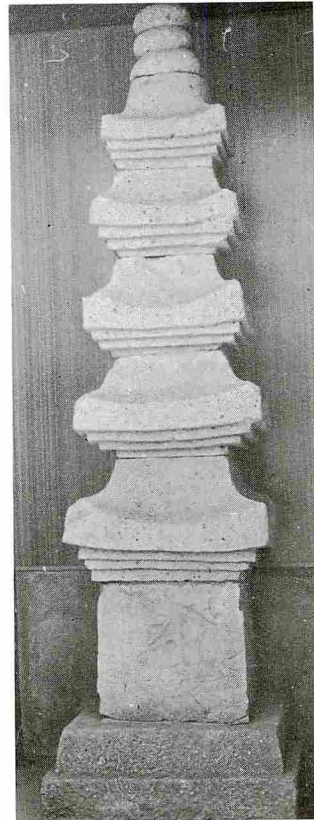
また大梵字あり、其傍に元亨三年七月五日立と刻たり。

上なる発菩提の三字は見えねど推してしか考へるのみ云々」

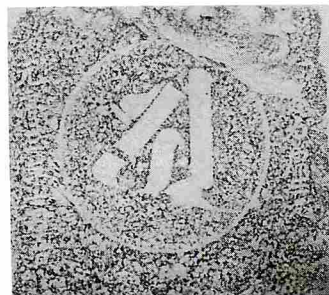
また「小隼の中、小堆の内より出てたりしをしにか組立しといへり、其時屍また大なる歯ともの出しか、さながら水晶の如也。また太刀下履なんとくさへの品出たりし云々」

さて、筆者はこの塔にはじめて接したのは昭和46年8月であったが、そのときいだいた所見は卒直にいて、塔身と笠部、請花、宝珠は本来全く別個のものであるということであった。真澄の記事によっても十分推測されるように発掘された部分を集めた、いわゆる寄せ集め塔であるということである。これについて若干の所見を記せばつぎのようである。

(1) 基礎 笠、請花、宝珠は青灰色を呈する軟



第16図 大曲虎王丸塔



第17図 大曲虎王丸塔身拓影

質の凝灰岩であるが、種字、銘文を刻む初層軸部＝塔身は全くの別石で流紋岩製であるということである。高度の造型性をもつ五重層塔を当初から全く異質の石材を用いて制作するものかどうか甚しく疑問である。

- (2) 仮にいま笠と塔身とが本来的に一具のものとしてつくられたとしても、一つの異和感が残る。すなわち第1層最下端の段形の幅に対し、塔身の上端がはみ出さず、ぎりぎりに組みあうが、きわめて窮屈、不均衡の感をまぬがれないと私見する。本来であれば今少しく塔身の身幅が狭くなるはずのものであろう。
- (3) 各層笠部の軒の反りは真反りではない。軒の勾配は写真、計測値をみれば急で両端で極端にはねあがり、鎌倉期を下降すると推察される。
- (4) したがって、塔身はいわゆる五重層塔のそれではなく、五輪塔の基礎＝地輪に相当するものであるということである。

以上は筆者が最初に本層塔に接したときに抱いた結論的所見であり、本年6月、同地の榑田凌次郎氏と会いそのように私見を伝えたのである。榑田氏もかねてこのことにつき疑問を抱かれていたらしく、昭和46年6月、京都の川勝政太郎博士来曲に際し、虎王丸層塔をご案内し、聞きたかったのは塔身と他の石とは別であり、同時代のものであるかどうか、古い郷土史家の中には地輪とみて鎌倉期のものと断定できるかどうか疑問に思っている人もいる位だとのべている。¹⁹⁾ 榑田氏が改めて虎王丸塔につき川勝政太郎博士に書面で伺ったところ折返し以下のごとき書信が榑田氏へ寄せられた。²⁰⁾

(前略) 土屋館の塔は現在の塔身だけが古く、屋根は室町時代のものと私は見えています。(中略) 男鹿のマンダラ堂五輪塔群を先年見たノートに照合すると虎王丸塔身は五輪塔地輪のア即ちア、バ、ラ、カ、キャのアがあることから可能性(五輪塔地輪)は十分あり私は賛成したいと思います。()は筆者の注。

しかし、こうした見解は川勝博士以外にも、すでに昭和初年に指摘されていたことを本年5月にはじめて知った。それは昭和9年の『大曲町郷土史』²¹⁾に収載された喜田貞吉博士から田口松圃氏あての書簡である。煩をいとわず転載する。

「いつか拝見しました虎王丸の塔の事について大山君も文字のある角石と上の屋根と石質が違ふとの事を注意して居られる通り、あれは上と下とちがふのではないでせうか。郡邑記には元亨といふ文字があったといふけれども今は見えぬと明らかに書いてあるのに、現在のものに文字は大抵判然して居る様ですが、若し現存のもの郡邑記の著者が見たのなら、文字が見えぬものは書きまいと存じます。或はあとから補ったのではないでせうか。

今一つの不審は郡邑記に五輪塔とありますが、今のは所謂五輪塔ではありません。今のは多重塔といふので、つまり五重の石塔です。多重塔は屋根形になり七重十重十三重などありますが、五輪は左記の様なものです。(図略)

今の塔の下の四角なのは五輪では地輪に相当するものです。郡邑記の著者五重の石塔と五輪との区別を判らなかったと云へばそれまでですけれども、或はもと五輪塔があり、今のは別の五重塔があったのを取り合せたのではないでせうか云々」

以上が『大曲町郷土史』に載せられた全文である。元亨紀年を追刻したのではないかという点には賛同いたしかねるし、五輪塔と五重塔の区別云々は江戸期においては無理からぬところとすべきであろう。しかし上と下とちがう、下の四角なのは五輪では地輪に相当するもの、とする見解は注目すべきである。

以上で、本層塔の塔身をもって五重層塔のそれではなく、本来的に五輪塔の地輪であり、かつ元亨紀年銘を有する鎌倉末期型式を表出した秋田県における重要遺品と断定する妥当性を有する根拠が揃ったとすべきであろう。

さらに念のため付記する。塔身に刻まれた種字の書体、刻法は川勝博士も気づかれておられるようであるがⅡにおいて一覽したマンダラ堂塔群その他R石質に刻出されたア種字に酷似し、管見をもってすれば同一人といわずとも同一系統に属する工人の手になるものとみられるのである。また三面に種字を刻出する例はⅡにおいてもいくつか存在する。虎王丸塔の県文化財としての価値は一層高まったというべきであろう。

3. 大曲市藤木八幡神社

藤木八幡宮はかつて藤木四十二館の郭内にあって館の守護神を祀っていたといわれる。ここに昭和48年10月榑田凌次郎氏を講師とする角間川郷土史研究会員の調査によって、本殿左側の木箱の中から一つの宝篋印塔の塔身が発見された。

塔身は高さ19.8cm、幅22.0cm、後部幅22.0cm厚さ20.3cmを測る小型の塔身である。幅に対し厚さが不足なのは後身部が削られているためである。

惜しむらくは左右の稜角が欠損している。塔正面を深さ2.2cm、たて12.0cm、幅11.8cmの頂部舟形輪郭状にほりくぼめ、その中に高さ9.8cm、膝幅7.3cmの阿弥陀如来の座像が薄肉彫りの蓮弁上に陽刻されている。

右側面に推計16.3cm×17.0cmで方形の線刻枠を施し字長10cmのサ種字を刻す。左側面も同じく線刻方形の枠内にサク種字（下半部欠損して字長不明推計9cm）を刻する。石質はR。

江戸の延宝年代においてもこの塔身は貴重な遺物と認められていたらしいことが、塔身の左右に残された墨書によつてうかがわれる。

（右）信心之趣□□仏具菩提心、奉造立八幡大菩薩

（左）乃至法界平等利益□□延宝八年五月一日

さて、この塔身の左右に細い陰刻銘が認められるが左の紀年銘の部分が欠損し判読に難渋を極める。

発見者の榊田氏が川勝博士に判読を乞うたところ、つぎのような仮案が示された。

右側 「□奉造立石塔二親□」左の刻字は種々検討の結果「嘉暦三年九月」としたい。筆者は川勝博士の鎌倉期とされる判読仮案に従う理由は、中央の舟形輪郭内に刻出される極めて洗練された阿弥陀如来座像はあるいは秋田地方の産でないと鑑せられる向きもあるかも知れないが、かかる刻法は、曲面をもつ五輪塔の塔身に刻出された座像と正にモチーフを一にするものであると考えるからである。

さらにもうひとつ重要な点は大曲八幡社のそれと同一系統の石質、流紋岩製であるということである。

この塔身は真実藤木四十二館にあったものかどうか、確認できないが、何等かの関連のもとにあったのではないかと考えてしかるべきであろう。

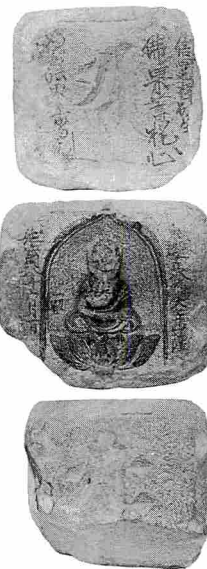
大曲市大保部落東北の水田中にある四十二館（県史跡）は塹濠状の凹部が連続し、不規則な平地を幾つにも分割している。本丸跡、御蔵跡、鍛冶屋敷跡、馬場跡等と名付けられる区画を有し、中世豪族の居館跡である。この塔身はこうした四十二館の一時期を指標するというべきであろう。

Ⅳ 男鹿半島加茂所在石造遺物の2・3について

陸の孤島と呼ばれて久しかった男鹿市加茂に所在する遺物と、それが秋田の中世石造遺物の中でどのような価値を有し、どう位置づけすべきかを略記するに当たり、同地の史的背景に少しくふれておくことは無意味ではないだろう。

本地区が文献に初見するのは文禄元年「秋田実季分限帳」、天正19年「秋田氏知行目録」に加茂村・かも村と記載されているのが最も古い。ここに青砂の名が見えないが、山の神社社にある元和3年5月18日の刻銘ある金銅製の御正体に「大作村、七郎左衛門、六郎二郎、九郎左衛門」の名がみえる。大作は青砂（現地ではアオサといわず、オサという）に通ずるものと考えられ『梅津政景日記』に徴しても、少なくとも戦国期には小集落が存したものとみとめられる。

昭和24年青砂字向山の傾斜面から宅地拡張作業中出土した経塚がある。筆者は昭和32年8月、これを実査したが、須恵器系—今日いうところの珠州系に属する甕であった。内容は竹筒の中に血書経を絹布で包んで、木栓を施して納入、甕の口はR石質で口縁部接触面をていねいに仕上げ外表面を打ち欠いた石蓋であった。甕の下には小石や木炭がしきつめられていたという。経塚の年代は少なくとも鎌倉期を下るものではない。²⁶⁾



第18図 藤木八幡宝篋印塔塔身



第19図 大曲藤木八幡神社宝篋印塔塔身拓影

大曲藤木八幡神社宝篋印塔塔身拓影

日本海の最西端にのぞむこの地区の住民はいかなる系譜につながるのであろうか。伝承によれば「平家の落武者ニテ最初務沢ニ居住セルモ、不便ノ為、海岸に移リシト云フ」あるいは、「漂流人ノ土着セルモノナリト云ヒ、而シテ何レニ漂着セルカ詳カナラザレ共云々²⁷⁾」と。

いずれも海上渡来コースを如実に物語り、戸賀、加茂2地区住民の頭最大長及び頭最大幅ともに大なる傾向を示し、能登、佐渡、粟島、飛鳥等の島々を連ねた相似線上にあるとする形質人類学的所見とはほぼ一致する。

さて、本地区にある中世石造遺物は加茂部落共同墓地の一角に忘却にゆだねられて埋没する。筆者がここにおいて最初に遺物に遭遇したのは前記経塚実査の折であった。

県内随一の巨塔北浦篠田の五輪塔につぐもので、水輪その他に小型の残欠があった。

(1) 塔身 a 40.0×46.025cm 月輪内、正面右半部欠損し、種字は一部不明だが、パであろう。上端面に径17cm、深さ16cmの納入孔をうがつ。

(2) 塔身 b 18.4×28.0 13.2月輪内パ

(3) 笠 18.5×28.0 種字部欠損、月輪内ラであろう。(2)(3)は同一個体をなすものであろう。

筆者は度々同地を訪れているが、昭和48年1月13日、新たに知見をうるに至った。しかし、それは昭和32年調査の未熟を暴露する何物でもなかった。

(4) すなわち上記2個体分の残欠の西下方、竹の繁みに覆われ六角形、亀甲状を呈する石室の屋根ないし、笠状の石造遺物2個体の存在である。いずれも表面をカマボコ型に削り、角端に突起を刻出する。一見して未完成品かとも推測される。62cm×40.0cmほどで未精査。

(5) 石室、石龕仏

墓地西方末端、往還の東側に無縁仏とされて、供養の木製卒塔婆が林立する石室である。石室は明らかに南面し、かなたの波頭をのぞむ。周辺に屋根、壁面を構成する板石、その他の石造物が散在しているが、昭和28年5月の大火以来の状況であるという。復元可能と思われるが現状計測の結果により所見をのべる。

左右の壁面を構成する板石は長さ63.5cm、高さ地上61.0cm、厚さ10.5cm、奥壁の板石は内側幅54.0cm、厚さ8.0cm、奥壁中央に肉厚8cm、高さ23cmの阿弥陀如来座像を厚肉彫りに一石彫成されている。やや面長、豊かな面相を現わした阿弥陀如来の座像は頭光身光の後背を伴い、定印を結ぶ。頭頂の肉髻、螺髪は永年、石室であったがゆえに、荒涼たる海浜の風雪によく耐えている。偏袒右肩の着衣も流麗、重厚な反花座は間弁をはさんで七葉を刻出している。

すなわち、すくなくとも厚さ16cmの板石を像容部分を残して削り落して造られた石壁である。

この石龕仏は秋田県において、きわめて稀なる優品の一つに数えられるべく、時代も鎌倉はくだらぬもの判ぜられる。しかしてⅡ、Ⅲに示した五輪塔塔身に刻出せられた像容は、恐らくは、この石龕仏に準拠して造頭せられたもののごとく推考されるのである。

左右板石は奥壁の板石を押え、正面は扉をはめたとと思われる現高3.0cm、幅8.0cmの石敷居がはめこまれている。石室の右側壁面は前方部および底部を幅6.0cmの逆L字状に薄肉盛りを残しているほかは、やや荒削りに仕上げている。

蓮座の直下に20.0cm×23cm2個の方形、長方形の小突起を有する敷石が埋設されている。

屋根の側面観は台形をなし、四注造りのそれとみられる。高さ38cm、幅64.0cm正方形、軒は厚さ8cm上幅64cmほとんど反転がみられない。軒下端61cm、軒先をわずかに斜めに切っている。軒下端の左右に3.5cmの三角状の溝を施し、その中間に長さ15cm、幅4.7cmの4条の榑を表わす溝を設けている。

このほか同じ台形を呈する1辺65cmの正方形の屋根と推測されるものがある。高さ33cm、軒上端にほとんど反転がみられず、軒先を斜め内側に切りこんでいるが、榑木の表現はない。また、大雄溪泉大和尚の塔の台石の下端に六角形状を呈する、屋根石とみられる部分が埋没している。

(6) 五輪塔残欠

さて、この石龕仏の周囲に五輪塔の残欠その他が乱積されている。



第20図 加茂青砂出土の経塚遺物右は石蓋

- ・基礎 a 高さ24cmの地藏菩薩の立像を彫る。
- ・基礎 b 29.3×23.2cm 上端の左右および中央部の1部が欠損している。種字はない。正面につぎの刻銘が存在するのは極めて重要である。

(右)

右

 志 者 為 過 去

			季
--	--	--	---

(中央)

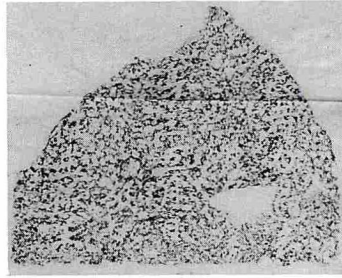
元

 亨 三 五 月 日

敬 白

(左)

--	--	--	--	--	--	--	--



第22図 加茂墓地五輪基礎拓影

- ・請宝 高さ33.5cm欠損部分多く、種字は不明。(I)と一具をなすものであるかも知れない。

なお墓地中腹に砂岩質の頂部三角状の風化し、種字不明であるが、板碑とみられるものが一基あることを付記しておく。既述の遺物は石質すべてRである。

加茂墓地に所在する遺物の概要は大略以上のごとくであるが、遺物の重要性にかんがみ、昭和52年度男鹿市教委において徹底調査を行ない、慎重に今後の保存策を構わずることになっており、その過程でさらに知見が得られるものと期待している。

V 石造遺物の原石問題と隣接県における関連遺物

1. 原石と製作地

以上、筆者は昭和51年現在まで皮相的に確認、観察しえた八郎潟周辺雄物川流域の中世五輪塔のほとんどと一部宝篋印塔その他を加えて概要をのべたつもりである。秋田の中世石造遺物は、今後精査が進むにしたがって、恐らく予想しないいくつかの事実が、われわれの眼前に露呈されるにちがいない。ここでは、そのうち最も基本的問題と考えられる原石と製作地問題について卑見をのべておきたい。

従来、一部の板碑はのぞくとして、それ以上に高度の石彫技術を要求される五輪塔、宝篋印塔の存在をもって中世城館址から出土、採集せらるる青磁、白磁、その他の陶磁片のごとく、秋田以外の地から搬入せられたもののように考える傾向が全くなかったとはいききれない。たしかに本稿において示した遺物のなかには筆者の管見をもっては、いずれの産とも判別し難いものが存在することも事実である。したがって全く持ちこまれなかったとは断言できない訳であるが、判別困難な遺物は将来の研究にまつとして、残余の大部分は肉眼的観察によって十分に産地同定をなしうるものと確信するものである。

さて、筆者はⅡ、Ⅲ、Ⅳにおいて遺物の各個にそれぞれ石質を註記してきた。すなわち、(石)＝石英安山岩(R)＝流紋岩、(K)＝安山岩、(S)＝砂岩、その他であった。一体これら岩石および、これを原材料とした遺物の製作地点はどこに求められるであろうか。

第24図はこの問題を鮮明ならしめるため遺物の石質別所在分布を示したものである。また付表は本稿で示した五輪塔各部分の石質別、地域別の総計である。

調査の精粗を如実に反映していることはもちろんであるが、きわめて示唆的である点も、また事実のようである。この図・表をみると、各石質は男鹿半島と八郎潟東岸部で若干の交錯状況を示している—それ自体が当代石造遺物を介しての経済的、宗教的動静を物語っているはずである—が、それ以上に強い偏在性をもって分布していることが観取されるであろう。

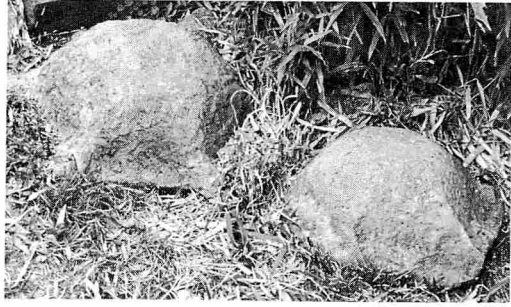
この偏在性は何を語るであろうか。日本海に臨む地域であるが故に、ここに集中的に陸揚されたものではないかという、はなはだ中央志向型の発想もむべなるなやであるが、かかる推察は「遠く騏驎を求めて近く東隣に在るを知らざる、のそしりをまぬがれない」といふべきであろう。

まず湖東部を圧倒するのは石英安山岩である。これは南北朝期板碑のほとんどがそうであるように森山火山岩類と総称される岩石であるのと軌を一にするものである。

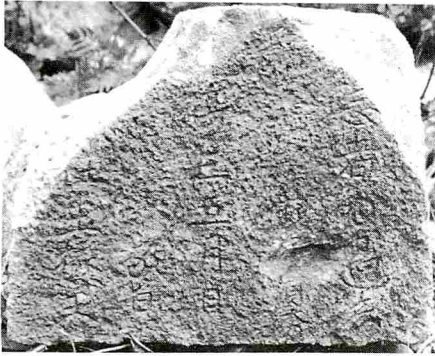
森山火山岩類は石英、輝石、紫蘇輝石、ハリの含有量において産出地点で多少の相違がみられるものの、ほぼ共通した岩質を有している。一方、本岩類と同一時期の火成活動による産石は秋田市東方旭川流域、南内越一本荘市



五輪塔塔身と笠部



亀甲状石造物



五輪塔基礎の刻銘（図亨三）



五輪塔塔身部残欠（地藏立像陽刻）



第21図 加茂墓地所在石造遺物



石龕奥壁の弥陀坐像（拡大）

東部に存在し、このうち後者が森山のそれに近い岩質を示しているが、湖東の石造遺物との関係は認め難い。²⁹⁾

湖東の石造遺物は前述のように一部の造型板碑と同様に、山体を構成する岩脈を直接切り出し加工したのではなく、女川層、船川層を貫いた塊状の岩石を掘り出して加工したものと考えられる。現に五輪坂、アサコ沢その他の数地点は長らく石材採掘加工場として存続していたのをみても容易に推察されよう。

つぎに安山岩というのは正式には複輝石安山岩という。集中地区は男鹿、寒風山周辺である。寒風山は40m段丘および海触台地に噴出したコニトロイデ火山で噴出物は4種類の安山岩溶岩流からなっている。³⁰⁾

これらの溶岩は「寒風石」の名で親しまれ、いまなお石材として採掘され、各種の石造建築用材として利用されている。この岩石が石材として用いられたのは縄文期の遺跡より出土する遺物に認められるが、対象外であるので触れない。文献の示すところによれば江戸後期、脇本浦田地区に久保田より来島せる石川忠右衛門をもって嚆矢とされているが、これをはるかにさかのぼること南北朝紀年板碑の存在をもって明らかであろう。

五輪塔、宝篋印塔はさらにこれに先行するものようであり、像容刻出板碑は多く室町期初頭に現出するがごとくである。ちなみに男鹿所在の板碑は砂岩、角礫凝灰岩製の3点をのぞき、すべてこの複輝石安山岩を用いているのは注目されることであり、またきわめて当然の背景があるのである。

花崗岩質の遺物は北浦篠田、常在院、女川地藏院の計4点にとどまる。篠田のそれは比較的新鮮な黒雲母の含有を示し、後2者は風化が目立ち、淡紅色を呈し、型的に八郎潟周辺部の当該遺物と異なるように考えられる。

類例の乏しいこの岩石遺物の原石産出地は、いずれの地であろうか。八郎潟周辺において明らかに日本海を北上、陸揚されたと考えられる花崗岩質の一石表裏地蔵をはじめ、多くの事例を認知しているが、これらはいずれも時代の下降する江戸初期頃のものである。

もっとも秋田県内にあっても基盤岩としての花崗岩の産出地は数カ所でみつまっている。例えば男鹿半島第三紀の基盤をなす角閃石黒雲母アダメロ岩は西岸の鬼の蛸、昆布浦、権現岩の3カ所にいずれも径数10mの小露出があり、花崗斑岩に近い特色を示している。肉眼的に中粒、やや斑状で淡紅色で黒雲母のほか有色鉱物の少ない岩石とされる。³¹⁾ 常在院、女川の遺物は後述する流紋岩との関連において、この岩脈から試みに採掘されたと考えられなくもないが、この判断はなお後日、岩石学者の助言をまけて検討したい。篠田のそれは種字をみると風化も手伝ってルーズな面があり、流紋岩系遺物とは全く比較にならず、あるいは海路陸揚されたものかとの疑いをいだかせなくもない。

砂岩製は花崗岩質と同様に少数であるが、北浦西黒沢宝田寺境内に集中している。この岩石は石灰質でPerlia有孔虫化石を含むやや硬質の砂岩である。³²⁾ この岩石遺物の単なる搬入でないことは同地の海岸の露頭そのものと比較対象すれば鏡下観察をまたずとも明瞭であろう。西黒沢の民家の石垣や護岸用石材としてこの岩石が用いられており、ここを産石地としてまず間違いなからうと思われる。

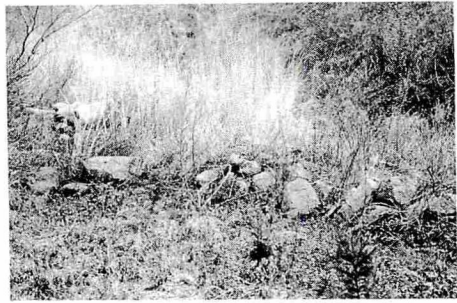
さて最後にR=流紋岩についてふれなければならない。かつて筆者はこの岩石を石英粗面岩質凝灰岩とよんでいたが、今後流紋岩(Rhyolite)という。

流紋岩は岩石化学組成上、数種類に細分されるが、本稿でいうところのものはすべてアノソクレス流紋岩を指している。

アノソクレス流紋岩というのは石基斑晶にアノソクレスを含む流紋岩のことである。この種の岩石は戦前日本列島では隠岐島後、北海道渡島半島、富山県南部に産することが知られていた。秋田県において当該岩石の産出が確認されたのは昭和30年代前半で秋田大学を中心とするグリンタフ研究グループによって男鹿半島の真山流紋岩の仲間として加茂で確認されたものである。³³⁾

しかし、この岩石の構成鉱物は加納 博、高安泰助氏によればつぎのようである。³⁴⁾ 斑晶は高温酸性斜長石、アノソクレス、石英、黒雲母が少量(1.0%以下)石基はアノソクレス石英、オパーク鉱物(90%)。

真山流紋岩の色観は灰白、淡黄、淡青緑、帯紫褐色などさまざまであるが、全体としてほとんど変質しておらず、層厚は300mに達するものとみられる。左図によって分るように岩石学的組成も産出地点によって必ずしも

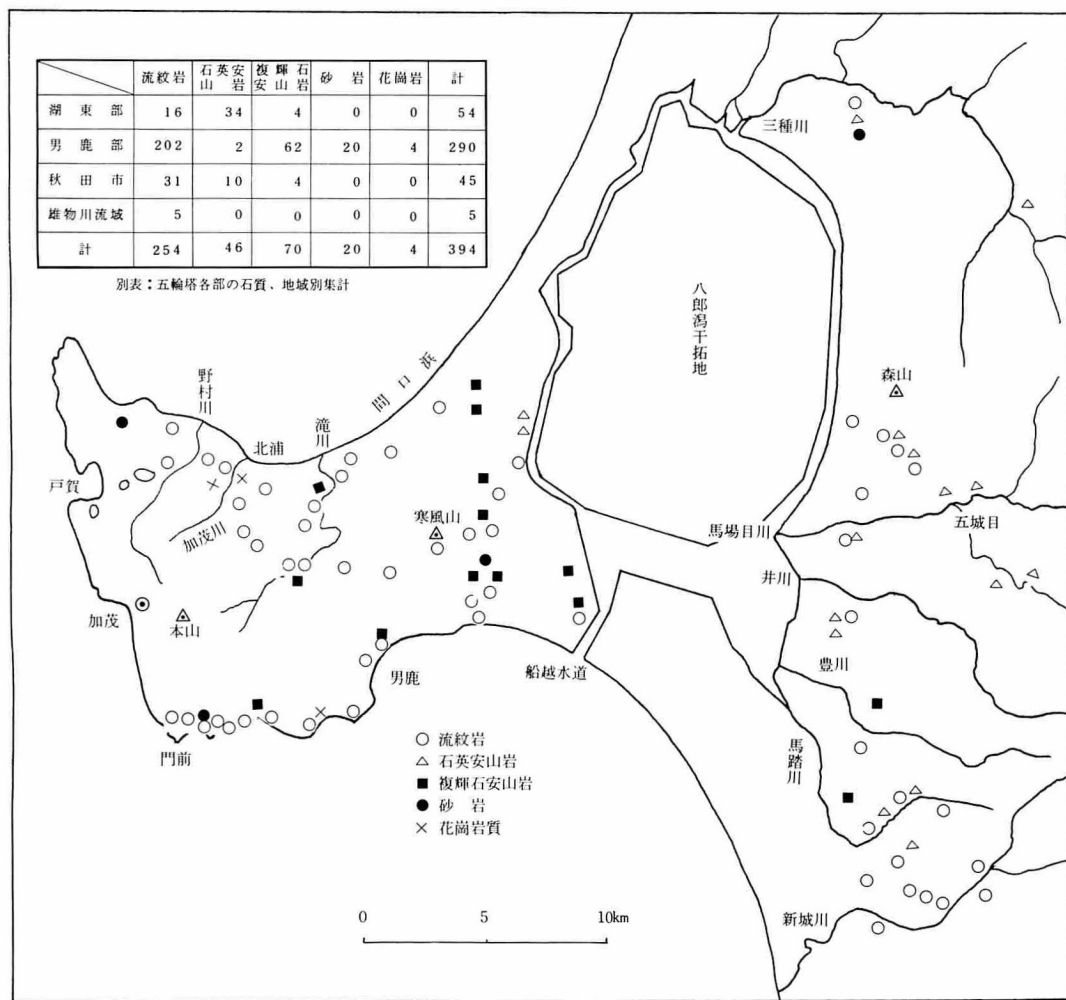


第23図 石英安山岩の岩塊一高岳山西方一

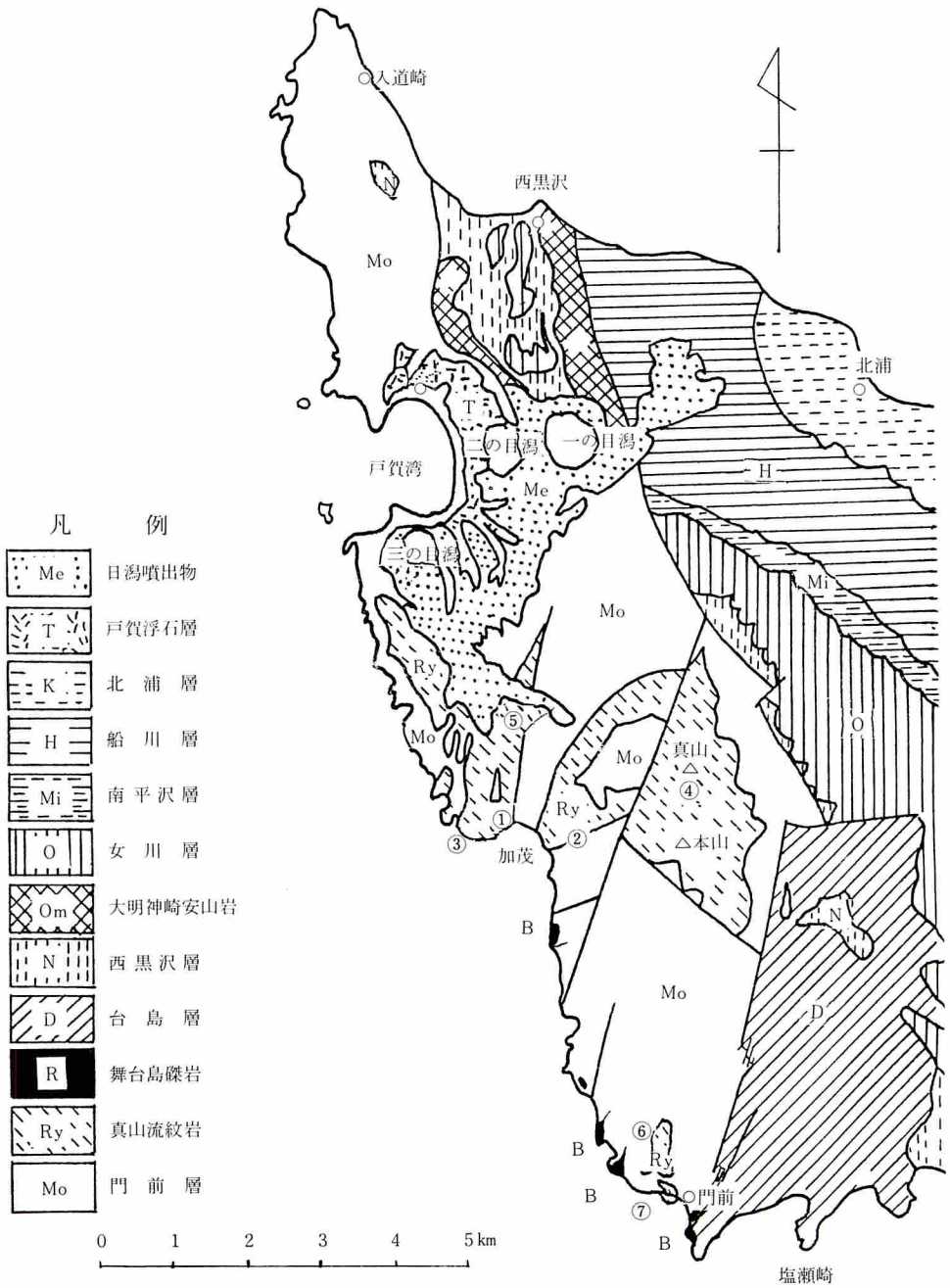
一様でないことはもちろんである。

また宮城一男氏によれば真山流紋岩として一括される岩石は男鹿半島、月山、温海地区を結ぶ線以西のアルカリ岩区に相当する点で本質的にことならないという。³⁵⁾

この岩石は上述のように特異な岩質を有するが故に、これを原材料として作られた石造遺物もまたきわめて非秋田的、渡来的要素を帯びた遺物として凝視されてきたのである。

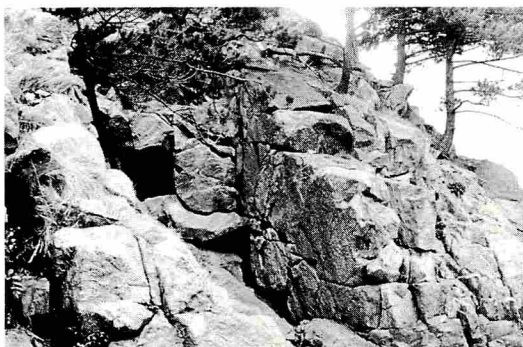


第24図 八郎潟周辺五輪塔石質別所在分布図

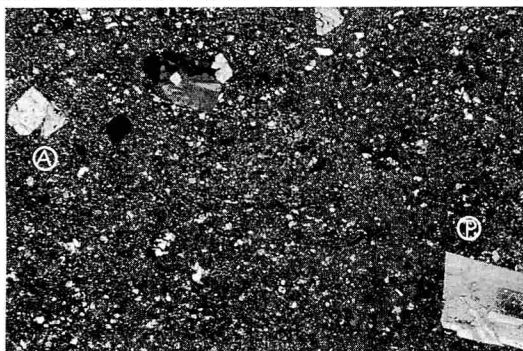


1. 黒雲母・アノソクレス・灰曹長石流紋岩
 2. ソーダ正長石流紋岩
 3. 黒雲母・灰曹長石流紋岩
 4. 黒雲母・灰曹長石流紋岩
 5. 普通角閃石・黒雲母・中性長石・石英安山岩
 6. 黒雲母・灰曹長石流紋岩
 7. 舞台島礫岩 黒雲母・灰曹長石流紋岩
- 1952, 調査; 藤岡一男, 井上武, 高安泰助, 本多朗郎, 狩野豊太郎.

第25図 男鹿半島西部地質図



第26図 上 加茂天か鼻流紋岩の露頭：下 同岩石の石垣利用



第27図 アノソクレス流紋岩顕微鏡写真
 上 加茂天か鼻 下 湯本妙見堂五輪塔残欠×20
 ①アノソクレス ②高温酸性斜長石
 でやや反り気味。右の軒端は欠損している。16cm月輪内に字長10cm、幅10.5cmの種字アを刻む。背面にノミ取りの

本稿Ⅱ、Ⅲ、Ⅳにおいて列挙したR石質流紋岩製石造遺物と加茂青砂出土の珠州系経巻の石蓋は一部鏡下同定により、他はすべて肉眼観察であるが、アノソクレス流紋岩と考えられ、かつそれが産石地は今日感覚からは恐らく信じ難いであろう男鹿半島の西端、加茂部落天が鼻付近に比定されるのである。

天が鼻の段丘崖下にあらわな露頭をみせる岩脈、崩壊し、海水の研磨にさらされた巨大なアノソクレス流紋岩の岩塊は地元住民の間で「焼け石（ヤケイシ）」と呼ばれ、西黒沢砂岩のように石垣などとして用いられている。

Ⅳにおいて略記した加茂墓地の石造遺物の種類、内容において誠に逸すべからざるものがあるのもここが鎌倉末期における石造遺物製作地であった可能性を考えるならば当然の実態として認識されるであろう。

2. 隣接県における関連遺物

秋田の中世五輪塔の石材として流紋岩が用いられ、男鹿、八郎潟東部、雄物川流域に分布している事実が指摘されたが、その歴史的意義は後述するとして、つぎに山形、青森県に関連する事例各1件を検証しておくことは今後当該岩石遺物を標準資料とする上に有効と考えるので、少しくふれておきたい

(1) 山形県鶴岡市加茂極楽寺所在石造遺物

山形県屈指の古湊加茂は寺や庵が地域の広さに比べてすこぶる多い。庵寺跡を加えると14にも達する。このうち極楽寺は大泉庄武藤氏にゆかりの寺といわれるが、昭和12年築港に使用する土砂採取に当って背後の山から五輪塔、宝篋印塔が出土し、昭和28年山形県文化財に指定されている³⁶⁾。

宝篋印塔は3基あり、いずれも黒雲母を多量に含有する花崗岩質の遺物である。型的に男鹿椿の塔に近似するものの、きわめて特徴的なのは基礎格狭間に三茎蓮華文を刻出していることである。

この文様は近江に圧倒的ないわゆる近江式装飾文様として学界の定説になっているものである。川勝博士によれば、恐らく若狭、丹後方面からの海上交通による伝播と解すべきとしながら、同地で作られたか、近畿で製作した後に運ばれたかは俄かに判断できないとの所見をのべている³⁷⁾。

極楽寺には花崗岩製五輪塔2基のほか数個の残欠があり、その中に流紋岩製五輪塔笠部残欠1個が混在しているのは注目しなければならない。

高さ23.5cm、軒幅34.5cm、屋根幅中央で22.4cm、上端15.5cm×15.5cmの正方形。請花を入れるほぞ孔は7×7cm、深さ3.7cm。軒の厚さ中央で7cm、軒端で9cm

痕が歴然である。笠裏面の細工も後方部と同一手法である。

この遺物は筆者のつたない経験からして男鹿加茂の製品と判断してさしつかえなきがごとくに考えられる。

(2) 青森県西津軽郡市浦村十三湊迎寺所在五輪塔

岩木川の河口港、十三湊は平泉藤原氏の隆盛時代にはじまるといわれ、鎌倉期に安藤氏が福島城を築城して以来、殷盛をきわめ幕藩体制の崩れとともに衰退し、今は全くの寒村である。『十三往来』にいう「西滄海漫々而夷船京船群集」という表現は人口にかいしゃされるが『回船式目』の奥書に書かれた七湊は越前以東、津軽に至る寄港地を示し、そのさいはてに位置したのが十三であったことはいうまでもない。

この地を中世石造遺物という観点から見なおす必要を認めるゆえんは、従来にぎにぎしく取り扱われている陶磁片のみが、日本海海域文化交流を指標するものでないという常識的発想からである。

そうした矢先、本年6月、青森県立郷土館の『展示品図録』に収載された檀林寺跡出土の複製五輪塔写真をみるにおよび流紋岩製と判断、一種の衝撃をまぬがれなかったのである。

檀林寺は平泉藤原氏の支族、秀栄が分家し、十三に住し、寿永元年出家、靈鷹山檀林寺に隠居したと伝えられる、由緒ある古刹であった。

『十三郷土史』第2巻⁴²⁾は「相内史」を引いている。「地は十三村端南方丘中の一平地にして、東西に直線の堤七・八十間のもの二条あり。其間隔百間余、西方梢々小高く現今松の倭小林あり。忠魂碑を建立し十三道は之の事蹟の西端を破壊して南に貫通す。之の付近一帯を隠居と称し、今は見ざれども隠居の松と称ふる一本松ありしと云う。少しく離れて俗にゴロ石と呼べる地藏堂あり。古来附近より数基の五輪塔土中より出土し、片々所々に現存しあるも、中に湊迎寺境内に移したるものは完全なる一基なれども、何れも何人のふん墓なるを知らず云々」と。

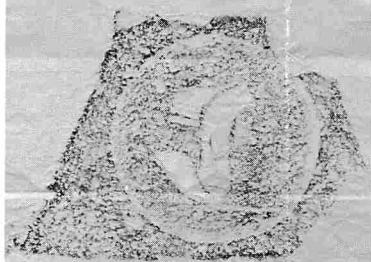
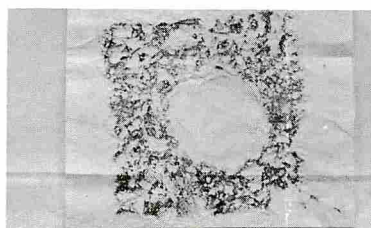
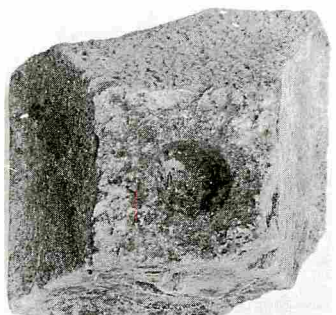
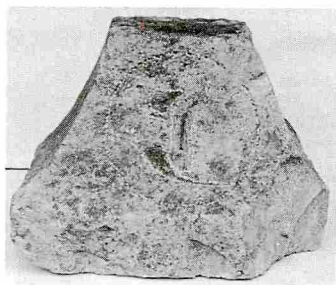
この五輪塔は十三湊迎寺本堂に向って右側の各種石塔群中に安置されている。岩質は間違いなくアノソクレース流紋岩製である。計測所見以下のとおりである。

基礎は高さ左右ともに22.3cm、幅上端26.6cm、下端は27.8cm、厚さ27cmを測る。

正面の月輪は地輪上端から1cm下って径17.2cmをもって刻出され、その内に字長10cmの種字アを刻む。

塔身は高さ19cm、下端から10.5cm上に最大径があるので、ほとんど球形に近いというべきであろう。球面に径12.8cmの月輪、字長8cmの種字バを刻む。

笠は高さ18cm、軒幅26.2cm、厚さ中央で5.2cm両端で6cmを測る。端から5cm入ったあたりから反りはじめ隅で1cm反転する。径15.5×16cmの月輪内に種字ラを刻む。四注の屋根の流れはゆるい反転を見せ、時代の格調を



第28図 山形極楽寺五輪塔笠部残欠

第29図 山形極楽寺五輪塔笠部拓影



第30図 極楽寺宝篋印塔
(基礎に蓮蓮文)

指標するというべきであろう。

宝珠、請花は一石彫成で普遍的。高さ21cm、請花は高さ8.5cm、下端の径9.5cmそれより8.5cm上の肩は最大径16.5cm恰好な鉢型を呈する。笠上端に入る突起は長さ2.5cm、径5cm。請花の上は左右内側へ2cm入り、ほぼ水平にカットして宝珠をつくりつけている。宝珠は、高さ12cm、最大径16.3cmであるから請花より小づくりだが重心が低く古調を表わすとすべきであろう。

青森県立郷土館が常設展示するのは当然のこと、稀にみる端正にして風格のある完型塔であり、鎌倉末期の型式から逸脱するものに非ざること明白である。

この五輪塔の東側に無雑作に置かれた、同じく流紋岩製の五輪塔笠の残欠を見出しえたのは予期しないことであると同時に、いよいよ十三周辺の容易ならざる実態をほうふつせしめるごとくである。

笠は高さ25.5cm、軒幅は36.7cm、厚さ中央で7cm、両端で7.5cm、端から10cm入ったところから反りはじめ、隅約1cmで反転している。四注の屋根の上端は17×17.2cm、径7.5cm、深さ5cmのほぞ孔をうがつ。

17cmの月輪内に種字ヲを刻み、背面にノミ取りの跡を残しているのは前記完型塔と同様である。

計測数値によらずとも一見して、完型塔より大形である。

ほかに、多数の五輪、宝篋印塔の残欠があるが、機会を改めて詳述したい。

前記五輪塔の正確な出土地点は十三部落の南端十三字深津2番地で、明治25年頃、長兵衛が厩を造作せんと掘り下げたところ出土したものであるという。

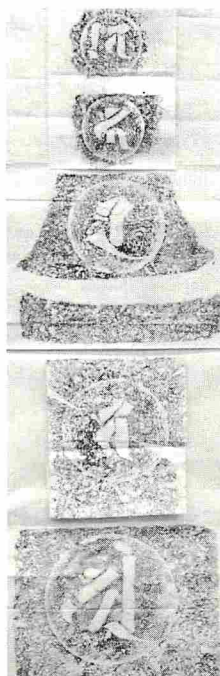
その後明治30年、昭和25年と相ついで残欠が出土し、いずれも湊迎寺に持ちこまれているのである。

当該五輪塔について『十三郷土史』第2巻の著者⁴³⁾はつぎのようにも記している。「五輪塔の完全なるものは白色にして尋常のものと異なり、又この付近に見えざる石質で、彫刻も整然としてりつぱなものである」と。誠に当を得た表現といわなければならないであろう。

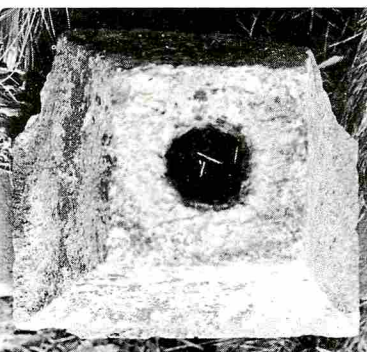
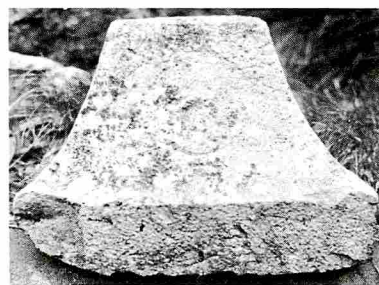
湊迎寺完型及び残欠塔は、しばしばのべてきたように岩石学的知見から、まさに白色にして尋常のものと異なるアノソクレース流紋岩製であり、種字の刻法、笠背面のノミ取りの残痕、あらゆる点において八郎瀧周辺に群在する遺物と同一系列に属するものであり、加茂極楽寺と同じく、その製作地の男鹿半島加茂であると断案して毫も疑うべき余地はないものとするのである。



第31図 十三湊迎寺五輪塔



第32図 十三湊迎寺五輪拓影



第33図 十三湊迎寺五輪塔笠部残欠

Ⅵ 若干の考察

八郎潟周辺と県内外遠隔地に分布する五輪塔は相互にどのような関連を有し、その中からどのような映像を読みとることができるであろうか。すでに明らかとなった石材と型式からみてみよう。

各遺物は原石の耐久性が造型に強く反映していることを考慮に入れても、例えば種字の刻法において顕著な差異の存すること明白である。すなわち、シャープに刻みこまれた流紋岩製の遺物は、それ自体一時期一型式をなすものと判断される。砂岩、複輝石安山岩製遺物に刻出された種字は一部初期のものに流紋岩製の技法が投射され、その限りにおいて類縁関係にあることをうかがわせるが、残余の遺物は時代的に後代室町期にずれこんで製作されたと考えられる。

石英安山岩製遺物は一部半島に浸透しており、特に像容表現に流紋岩製との強い紐帯交渉をしのばせるものがあり、種字の刻法において一部趣きを異にするものがあるが、現段階では流紋岩系の流れをくみながら一型式を形成しつつあったと理解しておきたい。

流紋岩製の像容表現は石英安山岩製に影響するらしいこと前述のごとくである。また、南北朝期の石英安山岩製板碑のそれにも継承され、さらに安山岩製遺物に退化した形跡をとどめて板碑の造立は終熄するもの⁴⁴⁾のようにある。

秋田県における五輪塔製作の絶対年代は元亨年代を下るものでないこと確実となったが、複輝石安山岩、石英安山岩類については如何。銘文は未検出ながら種字の刻法からほぼ同時代ないし一部をのぞき、南北朝期の製作と考えてよさそうである。

しかし流紋岩製、複輝石安山岩、砂岩製、石英安山岩、花崗岩類にみられる種字の異なった刻法は同時代の異系統の工人による技術の重層性を意味するのか、あるいは同一系統の世代による発展として把えるべきか、にわかに判断することは今のところできない。

要するに、はじめに流紋岩製遺物の強い供給があり、併行して若干の宝篋印塔の製作が行なわれた。特に流紋岩製にみられる技法は同一人か、または同系統の工人になるものであることは明らかである。そして他の石質の遺物には、これと技術的に交渉があり従属関係をうかがわせる要素が濃厚に残存するということがいえそうである。

それでは一体、これらの遺物はいかなる状況下に胚胎したのであろうか。流紋岩製遺物を例に卑見をのべてみたい。

山形県加茂極楽寺出土の宝篋印塔の一基に三茎蓮華文が刻出され、それが近江地方に発生源をもつことは先述した。近江式装飾文といわれる石刻文様は現在、全国に609例検出され、うち458が近江に集中している。その種類も2類7種に分類され、このうち三茎蓮華文の分布は若狹、越中、北限が羽前加茂で、25か国に及び総数364に達している。このうち近江は306、さらに日野町が47で三茎蓮華文においても同町が卓絶していることが知られている。

ところで近江における花崗製石造物には2系統あり、このうち日野町蔵王を中心とする遺物群は、美濃、尾張若狹一円に分布し、いま一つは鎌倉前期から約20年間にわたって岩倉町付近を中心とする石造遺物群で琵琶湖沿岸部に限られる傾向が強いとされる。そして、前者は西撰の石屋と並び大和の伊派石大工と深い関係によって成立したと考えられている。大和の著名な石大工は鎌倉期においては伊派であるこというまでもないが、このほか大藏、平、橘姓を名のる名工が中期から南北朝前半に大和中心に活やく、伊派と形式、細部手法において同系であるとされている。

近江における石大工名は嘉元2年、平景吉の2例あり、越前大谷寺の元亨3年九重塔の石大工平末光が景吉の直系で出張製作と考えられている。⁴⁵⁾

すなわち、加茂極楽寺の三茎蓮華文様の伝播は関西式宝篋印塔の中にあっても、如上のごとき近江の石大工またはこれと親縁関係にある大工、小工、あるいは伊氏の系統ないしは傍系の工人に密接にかかわりをもつのではないかという推考が浮んでくるのである。

さて、加茂極楽寺石塔群中に流紋岩製五輪塔笠部残欠があり、注意すべきであることも、すでにのべたとおりである。この残欠は筆者の稚拙な岩石の肉眼観察および遺物の型式からみて、明らかに男鹿半島加茂のアノソクレース流紋岩製そのものであり、男鹿加茂から海路、陸揚されたものであると考えるのである。⁴⁶⁾

鎌倉型式の花崗岩製宝篋印塔と流紋岩製五輪塔残欠の共伴出土の関係をどう解すべきか。きわめて短絡的に解

積すれば関西式塔の製作にたずさわり、あるいは関与した石大工と男鹿加茂において石造作業にはげんだ工人との間に血脈を分つ有意の関係が存在すると推解するのであるが如何であろうか。

筆者は重ねていう。八郎潟周辺、一部奥羽沿岸、雄物川水系に検出される流紋岩製遺物は日本海を北上し、第2次的に秋田にもたらされたものでは決してない。

これらの石造遺物をのこした工人は恐らく、近畿、北陸日本海沿岸から、鎌倉末期の日本海海運によって羽前の古湊加茂へ着舟、さらに石材と需要を求め北航、男鹿加茂へ遍歴、漂泊の星霜を重ねたグループではなかったか。

現在、われわれが見ることのできる遺物の量から推察して、かれらは相当期間、男鹿の加茂に滞留し、あるいはここを墳墓の地と定め、石造作業にいそむとともに在地周辺に遺物の伝播をなしたのではなかったろうか。⁴⁸⁾

そう考えたとき、筆者の脳裏によみがえるのは、加茂墓地のただずまいに、朽ち果て、無縁の忘却にゆだねられた石の廃屋であり、経塚のいとなみに外ならない。

しかし、すでに経塚はたずねるによしく、灰色の石室のみが、ありし日のかれらの記憶をよびもどしてくれるのではないかと思うのである。

すなわち筆者は男鹿加茂の入江に、いわゆる「道々の輩」とよばれた無名の渡り職人の影を彼我の関係を通してみるのであるが、はたしてこれは幻覚にすぎないだろうか。

かかる幻覚が単なる妄想でないとすれば、いまだ手工業の歴史に深く埋没するかれらが、なにゆえに日本海沿岸を北上し、営々秋田の岩石に取り組んだのか、その理由が問われるであろう。

これに対する回答は恐らくは当代の先進西日本におけるかれらを取りまいた社会、経済、宗教史学の立場から、有力な証言が得られると思うが、この点に関しては筆者の全くなしうところでないのを遺憾とする。

しかし、日本海海域の経済文化交流に大なる役割りを果たした鎌倉末期の津軽安東氏の主体的動向を無視してこの問題に接近できないこともまた事実ではなからうか。

日本海海運の最北端十三湊をふくむ津軽の西浜は得宗御内人安東氏の支配下にあり、安東蓮聖は得宗の信任あつく、長大な日本海沿岸海運の拠点若しくは若干の例外はあったものの、北条一門によって確実におさえられていた。⁴⁹⁾

嘉元4年、鮭や小袖などを積んだ関東御免の津軽船は越中放生津住人の船だったが、その基地の一つに十三湊を想定することは至難ではない。

若狭はもとより、近江、播磨さらに西国にまで得宗被官として活やくした安東氏⁵⁰⁾が鎌倉末期に秋田、男鹿と無縁でなかった証拠は、十三湊迎寺所在の流紋岩製五輪塔によって明白であろう。

ちなみに、十三湊迎寺の流紋岩製五輪塔は平泉滅亡後、秋田男鹿に地頭職を与えられた橋氏の西国移住後における、安東氏と秋田、男鹿との事実関係を示す資料でもあり、安倍盛季が貞応元年、桃川田一丁寄進を初見として安東氏の男鹿所在社寺修葺を伝える『本山縁起別伝』⁵¹⁾のあなたがち無稽の事実と断定できない傍証ともなる。

さて、近年出版された『日東流外三郡誌』⁵²⁾が収録する「回船抄」は元禄年代の記録であるが、安東船は軍船、積荷船、乗人のみに用いる船、貴賓船の4種、十三よりの積荷は干魚、干海草、干貝、皮、草根葉、湯花石等、持来る積荷は刀剣、兜鍪、塩、米、金子、仏像、諸道具、衣等なり。と「十三往来」の記事を生々しい現実のごとく表現している。

こうした物資の陸揚は十三湊およびその周辺から出土する南宋青磁、元代の青磁、珠州焼等、鎌倉時代と考えられる出土陶磁片、さらに元末明初、すなわち南北朝、室町に当る舶載磁器、占瀬戸、瓦質手焙りなど多彩な陶磁片をもって容易に推察可能なのであって「回船抄」の記事は決して誇張された形容ではないと考えられる。⁵³⁾

辺境におけるこのように多彩な物資の移入は当代の中央官衛や権門勢家の背景によって支えられたものではすでになかったであろう。それは得宗御内人、宗教者、商手工業者、帰化系技術者を一団とした海上河川交通開発集団の活躍によってはじめて可能な分業流通の展開であったといえよう。⁵⁴⁾

十三との関係においてみれば被官安東蓮聖は高利貸活動、播磨福泊の修復、和泉久米多寺の修復に尽力し、豪商的、官僚的武士とされ、久米多寺は後に華嚴、戒律、真言の道場として東大寺、西大寺とつながりを強めた。

この西大寺は徳治2年、備中得宗領の河川開発に関与し、これに石工伊行経が参画している。⁵⁵⁾ 行経はかの宋人石大工伊行末の後裔一族であること、すでに川勝博士が論証して久しい。⁵⁶⁾

とにかく北条一門とそれに密着した西大寺律僧が鎌倉後期の日本海上交通にはたした役割りはきわめて大きく中でも蓮聖の動きは瞠目すべく、蝦夷、十三湊から摂津、和泉におよぶ海の道はこの安東氏に負うといつてよさ

57)
 そうである。

つまり秋田の石造遺物の製作者の故地は、こうした歴史的に開発せられた海上の道に求めることができるのではないだろうか。かれらはまぎれもなく得宗専制下に生きたゞ道々の輩、であった。それは西大寺に関連した伊派の石工であったか、先述の近江系であったかの確証はいまのところないが、安東氏と密接な関係をもって北上した可能性が大きいことは否定できないであろう。

しかも、それは恐らく、古来、奥州、北陸から京阪への物資輸送の要衝に当る越前敦賀、あるいは得宗領若狭の小浜湊を基点とするものでなかったか。

とまれ、羽前加茂、雄物川水系上流深く伝播した流紋岩製石造遺物は得宗被官安東氏と直接、間接のかかわりを持って顕在したものであると、五輪塔のみならず、能代川上流、八郎潟流入河川上流に点在する板碑、宝篋印塔に付帯する河舟陸揚の伝承にも安東氏の面目をしのぼせるものがあるようである。鎌倉、室町期に日本海を往反、流通した東アジア的、あるいは国内産の文物は多彩にして、かつ莫大なものであったと推察される。これに比して正に片々たる流紋岩製石造遺物は微量ではあったかも知れないが、船底深く積みこまれ、あたかも被官安東氏の無名の軌跡を映し出す像映剤として広域に伝播したものと考えられ、今後の調査によって秋田男鹿産の流紋岩製石造遺物が日本海沿岸各地に確認発掘されることが期待されるのである。

Ⅶ 要 約

1. 八郎潟周辺、雄物川水系には鎌倉末の元亨年代を少なくとも上限とし、一部南北朝期におよぶ中世石造遺物五輪塔の造立、需要が大きかった事実の明白であること。
2. これらの遺物は型的に流紋岩製遺物を中核とし相互に親縁関係を保ちつつ若干の型的偏差を示すものの如くであるが、原材料たる岩石はほとんど秋田県内の産石であること。特にアノソクレス流紋岩は列島規模からしてもきわめて特殊な岩石であり、それをを用いた遺物には幸い造立年代を示す紀年銘が彫りこまれ、同定容易な石質と相まって時代鑑別の基準資料をなすこと。
3. 流紋岩製遺物は男鹿半島加茂天が鼻の産石であり、同地における石造遺物のあり方からしても製作地であると断定されること。他の石材に比べ技術的に優品が多く、遠隔地に拡散伝播する傾向をもっていること。この傾向の根底に鎌倉末期における安東氏の力が大きくはたらいていたのであり、その意味において、同遺物の存在を確認することによって、われわれは被官安藤氏の動向を追跡するメルクマールとなすこと。これに対し他の石材はきわめて局地的、在地性を志向する如くである。
4. 製作者は秋田生えぬきの石工ではなかったが、安東氏との関係で近畿地方から日本海沿岸を遍歴、加茂に定着したゞ道々の輩、であった可能性の大きいこと。

Ⅷ 今後の課題

1. 「石造遺物を通してみる秋田の姿」は本稿が対象とした五輪塔のみをもってしては一知半解であるこというまでもない。他の宗教関係石造遺物、館址出土の石造遺物等を網羅してはじめて鮮明になしうるのであろう。
2. 秋田県内の石造遺物は今後、視角を変え再検討される必要があり、広大な境地を残しているが、その際隣接諸県の資料との比較研究が不可欠の要件である。

その意味から筆者は、まず日本海域の安東氏の動向に注目したい。具体的には十三周辺の石造遺物は当該地方においてもやや閑却せられているやに認められるので、それが徹底調査は対東アジア貿易という壮大なスケールの中で、秋田を含む日本海沿岸地域間交流の未知なる側面が陶磁片の研究とあいまって考古学的に解明されるものと確信している。

さらに地域を秋田以南、北陸地方における現存遺物および中世遺跡の発掘調査にも注意する必要があることを付記する。

3. すでに明らかのように石造遺物の調査は完型遺物はさることながら残欠を堀りおこすべきであること。しかして岩石学者の協力、参加が強く要請されるのであり、鏡下観察はもちろん、将来はX線回折法、KA法による年代測定等の理化学的方法を駆使して石材の産地同定が、遺物そのものの研究と併行してなされねばならないこと。

また、石造遺物の原位置残留性が問題であるが、下部に埋設されている可能性のある遺構との構造的関係にお

いて理解する必要があること。

換言すれば石造遺物がやますれば美術、工芸的観点から取り扱われがちであった傾向を脱却し、歴史考古学的範ちゅうの中で処理する方法を定着させなければならないということであろう。

4. 例外はあるものの、中世石造遺物の多くは造立者と造塔の功德を説いた宗教活動の相乗関係においてはじめて成立しえた宗教遺物であったと考えられる。しかして、かかる布教宣伝活動をなしたものはいかなる宗教的系譜につながるものであったか。また、それに対応した造立者はその地域内でいかなる位置を占めるものであったか。ちなみに近江日野町における中世石造遺物の調査を通じ、大和との交流を無視できず、これを媒介とした修験者の活動が明らかにされつつある。秋田地方ではどうなるのか、今後、歴史、民俗、宗教関係研究者との共同研究によって解明される必要があろう。

謝 辞

本稿をなすについて八郎瀧町伊藤貞信氏（町史編さん委員）、佐藤成諸氏（加茂小中教頭）、寺内地区の調査に当り藤原茂氏（本館職員）、そして津軽十三湊の調査に際して木崎和広氏（本館職員）から、特段のご協力をいただき、また十三湊迎寺任職中井恭宝師の温かい接遇をたまわった。その他各地で多数の方々から情報の提供や調査での協力をいただいた。明記して心からお礼申し上げます。

奈良修介氏（県文化財審議委員）、榊田凌次郎氏（大曲市教育委員長）の2氏からは、有益なる助言、ご援助いただいたことを記し厚くお礼申し上げます。

地質、岩石学的方面については加藤万太郎・渡部晟氏（本館職員）から助言いただき、特に今回、加藤氏からは岩石薄片を作成していただいたことに対し深謝いたします。

本稿半ばになった1月8日、秋田大学鉱山地質学教室の加納博教授から湯本所在の五輪塔残欠の1片について鏡下同定、写真撮影いただいたことに対して末筆ながら厚くお礼申しあげます。

註

- 菅江真澄のぼう大な著作の所々に県内外の中世石造遺物の図示と説明がある。大曲虎王丸塔、合川延慶碑、八郎瀧町萱戸屋の板碑群はその最たるものである。
- 石川理紀之助は明治30年代、適産調の実施と同時に川尻村外36か村について「旧蹟考」をまとめている。大部分仮綴のまま石川会館に保管されている。その中に五輪塔、板碑等を略図で示している。
- 深沢多市「秋南古碑考」昭和8年。篠沢四郎「羽後式板碑について」秋田史壇第2輯 昭和8年、その他。
- 秋田県『秋田県史』考古篇の中の有史の部 昭和35年。
- 奈良修介『秋田県の紀年遺物』小宮山出版 昭和51年。
- 奈良修介「東北の仏塔」新版仏教考古学講座、第3巻 昭和51年。
- 榊田凌次郎「大曲市内の板碑について」大曲市郷土史資料第4集 昭和38年・同『中世大曲の研究』昭和39年、同「仙北大曲地区の板碑について」秋田考古学24号 昭和39年・同「大曲市内の板碑調査日記」大曲市郷土史資料第14集 昭和49年・茂木久栄「湯沢の板碑考」湯沢郷土史資料第11集 昭和39年・六郷町教委『六郷町板碑考』昭和44年。
- 後藤守一「奥羽地方に於ける作善碑の一種に就いて」考古学雑誌14の10 大正13年。この報文で男鹿湯本妙見堂五輪塔を写真で紹介している。男鹿市『男鹿市史』昭和39年・奈良修介「男鹿半島の石造物について」秋田考古学 24号 昭和39年・拙稿「男鹿半島石造遺物調査概報—五輪塔所在地名表」出羽路 29号・若美町教委『若美町石造遺物写真集』昭和49年・五城目町教委『五城目町の石造記念物』昭和50年。
- 川勝政太郎『石造美術入門』社会思想社 昭和47年、岡田香逸『石造美術概説』綜芸舎 昭和43年。
- 11、14、15、石川理紀之助『旧蹟考』金足村、脇本村、南磯村の部に図示あり。
- 加成惣一郎「金足村地名研究」村の知らせ、大正13年4月・『金足村誌附録』大正12年（未刊）。
- 菅江真澄「のきのやまぶき」内田武志・宮本常一編菅江真澄全集第4巻 昭和49年
- 大曲市榊田凌次郎氏のご教示による。榊田氏は昭和50年西仙北町公民館主事からの情報によって実見された。

17. 秋田県教委『秋田県の文化財』（合本）第3集掲載 昭和46年。
18. 菅江真澄『月の出羽路』9巻深沢多市編秋田叢書 第9巻 昭和6年。
19. 榊田凌次郎「大曲市内の石造美術」(1)・(2) 仙北新聞 昭和46年6月26日、30日付
20. 昭和51年10月25日付、川勝政太郎博士より榊田凌次郎氏あて書簡。榊田氏の許諾をえて抄記する。
21. 大山順造編『大曲町郷土史』昭和9年
22. 仙北新聞、昭和48年11月15日付記事および榊田凌次郎氏の所見による。
23. 24、『秋田県史資料』古代、中世篇、昭和36年。
25. 大日本古記録『梅津政景日記』第8巻 昭和36年。
26. 拙稿『加茂青砂出土の経塚について』男鹿市文化財調査報告№2 昭和41年。
27. 加茂青砂小中学校蔵『学校沿革史』大正15年編合綴の「郷土史」による。
28. 岡本一郎「男鹿半島々民の生体計測学的研究」人類学輯報 20 昭和33年。
29. 長谷紘和・平山次郎「五城目地域の地質」地域地質研究報告 秋田6の3 昭和45年、斎藤匡臣「森山火山岩類の岩石学的研究」秋田地学№7・8合併号 昭和39年。
30. 32、藤岡一男「5万分1地質図幅説明書」戸賀・船川 昭和34年。
31. 前掲、藤岡「地質図幅説明書」および宮城一男「東北真日本グリーンタフ地域の基盤花崗岩質岩石」岩石鉱物鉱床学会誌 45の5 昭和36年。
33. アノソクレス流紋岩産出地は男鹿の加茂の外 (1)富山県東砺波郡大鋸屋村上田、若杉 (2)同砺波郡太美村白中 (3)山形県東田川郡朝日町大泉 (4)北海道後志国取淵村、(5)同国泊村茅沼炭鉱付近、(6)同国西嶋牧村千走川中流 (7)胆振国東倶知安村ペンペナイ (8)石狩国沼田村浅野炭鉱付近 (9)北見国丸瀬却町金山の9か所がある。
34. 加納博・高安泰助「男鹿半島真山流紋岩の研究—とくにアノソクレス流紋岩について—」秋田大学地下資源開発研究報告13号 昭和30年。同岩石に関する記述は本論文に負う。
35. 宮城一男「男鹿半島真山流紋岩の化学組成とその意義」岩石鉱物鉱床学会誌 48の1 昭和37年。
36. 山形県教委『山形県の文化財』図録 昭和47年。「関西方面から移入したものであろうか。地方の作品と思われない優れた五輪塔云々」と説明されている。
37. 川勝政太郎「石塔類に於ける蓮華及び孔雀文様」日本石材工芸史 昭和46年。
38. 市浦村史編纂委員会『市浦村史資料—東日流外三郡誌』所収 昭和51年。
39. 住田正一編『回船式目の研究』昭和17年 東洋堂
40. 古田良一「海運と文化の伝播」歴史 第3輯 昭和26年、同「津軽十三湊の研究」東北大学文学部研究年報 第7号 昭和36年、宮崎道生『青森県の歴史』昭和50年。
41. 青森県立郷土館『展示品図録』 24頁 昭和51年。
42. 43、豊島勝蔵「十三郷土史」 第2巻(謄写)昭和23年。十三湊の五輪塔については同じく相内史蹟を引いて、中村良之進が『陸奥古碑集』(昭和2年)でふれている。中村氏は同書において板碑とともに五輪塔類を多数図示されている。
44. 八郎潟周辺に所在する板碑で流紋岩製のものは今のところ一基も見出されない。すべて砂岩、凝灰岩、石英安山岩、複輝石安山岩をもって作出されている。
45. 田岡香逸『近江の石造美術』(1)昭和43年 (2)昭和44年 (6)昭和48年 (3)昭和51年 民俗文化研究会
46. 前掲註33、山形県東田川郡大鳥川上流大泉においてもアノソクレス流紋岩を産出するが、アノソクレスは斜長石より多く、ときに後者を全く欠くばあいもすくなくない。また、笠部の型式そのものが八郎潟周辺のそれと同一と判ぜられ、大泉の流紋岩ではないと考える。
47. 羽前加茂周辺の地質状況を瞥見すれば広義の朝日山地に含まれ、第三紀以前の花崗岩類が基盤をなしている。加茂付近において高館山および湯の浜温泉の温泉神社付近に花崗岩類の露頭がみられ、特に後者は径500mの岩体でボーリング資料で地下100~300mの層厚が確認されている。米地文夫「加茂台地の地形と地質」加茂港史、昭和41年、参照。極楽寺石塔の搬入か現地製作か、早急に同定解明する必要が認められる。
48. 男鹿加茂のみならず、中世ごろから石造物の製作地、工人は日本海各地に存在していたと考えられる。例えば、平家の落人弥平衛宗清の子、権三郎が石材を求め、佐渡の小泊に入ったという石屋起源伝説や、同地の中

世石造物に小泊産の石英安山岩が多いことによっても知られる。計良勝範「墓と石造物」佐渡相川の歴史資料集 2 昭和48年。

49. 網野善彦『日本の歴史』 第10巻 「蒙古襲来」 昭和50年 小学館
50. 豊田武、遠藤巖、入間田宣夫「東北地方における北条氏の所領」 日本文化研究所報告 別巻第7集 昭和45年。
51. 「本山縁起別伝」秋田叢書 第2巻 昭和4年 原本は船川港門前本山栄太郎氏蔵。
52. 『日東流外三郡誌』は市浦村史資料篇上・中として刊行されている。土崎湊秋田孝季、津軽和田長三郎によって寛政年間、日本82か国を巡脚し、安東一族に関する文献、伝説を渉猟集成したものといわれ、今後文献史学の立場から史料批判がなされるであろう。
53. 平山久夫、香取昂宏「津軽十三湊採集の古瀬戸陶片」 北奥古代文化、第4号、昭和47年。平山久夫「青森県の中世陶磁について」 北奥古代文化 第6号 昭和49年。
54. 55. 三浦圭一「中世の分業流通と都市」 大系・日本国家史 2 中世・東大出版会 昭和50年。
56. 前掲註37参照
57. 豊田武博士によれば東北地方では北条氏の所領と明らかに考えられるものは意外に多く、郡地頭職の対象となつと思われるものは、奥州54郡とすれば、その3分の1に当る。この他出羽山北平賀郡、北寒河江庄、大泉庄や陸奥の諸庄園、郷保等で北条氏に関係のあるものをあげれば、その密度は驚くほど高いといわれる。前掲註50参照。
58. 流紋岩製石造遺物が男鹿半島で製作されたと考えられる元亨、嘉暦年間の津軽では安東一族の内紛一津軽大乱、津軽騒乱とよばれ、幕府滅亡の要因となった一が、し烈をきわめ、ようやく鎮静化した時期に相当していることを加味して地域的密集、拡散の現象をどうとらえるかが問題であろう。